ド・ラ・モット・フケー作『大蛇殺しのジグルト』

石 川 栄 作

》Sigurd, der Schlangentöter《 von Friedrich de la Motte Fouqué

Eisaku ISHIKAWA

Abstract

Friedrich de la Motte Fouqué (1777-1843) hat 1808 das Heldenspiel 》Sigurd, der Schlangentöter《 geschrieben. Es ist sicher, dass er dabei als Stoff hauptsächlich die nordische 》Völsungasaga《 benützt hat, indem er so viel verschiedenartige Episoden aus der Saga wie möglich in sein Werk eingewebt hat. Sein Interesse liegt nicht in der Neuschöpfung der tragischen Sigurd-Geschichte, sondern vielmehr in der Wiederherstellung der altnordischen Nibelungensage.

Im Vorspiel verknüpft Fouqué nämlich einige alte Sagen von Odin mit der eigentlichen Handlung vom geschmiedeten Schwert Sigurds. Darum geht es auch in der ersten Aventiure, wo Sigurd mit dem Schwert die Schlange tötet und danach die Vögel versteht. In der zweiten Aventiure führt der Verfasser weiter Brynhildurs Erwache und zweimalige Verlobung aus, die in der Saga nur einfach erzählt sind. In der dritten Aventiure findet man aber auch die Einwirkungen des Nibelungenlieds, besonders bei drei Kampfspielen in der Giukesburg und beim erstmaligen Auftritt Gudrunas beim festlichen Mahl. Die aus der Saga herkommende Königin Griemhildur, die dem Helden Sigurd einen Zaubertrank reicht, spielt im Grunde eine wichtige Rolle. Sie erscheint noch böser in der vierten Aventiure, wo sie ihren Sohn Gunnar zur Werbung um Brynhildur verführt. Ihre List beherrscht danach die Handlungen, die von Fouqué noch ausführlicher beschrieben sind. In den innerlich erweiterten Schilderungen des eifersüchtigen Gunnar und des wieder Gedächtnis gewonnen habenden Sigurd besteht die Eigenheit von Fouqués Werk. Die Episode vom Zank der Frauen in der fünften Aventiure bleibt treu dem nordischen Original, ja ist wörtlich sogar identisch. Das gilt auch in der sechsten

Aventiure, wo Sigurd von Guttorm ermordet wird und Brynhildur danach in die Flamme springt, um dem Helden in den Tod zu folgen. Fouqué betont noch dazu die nordische Sagenwelt, indem er drei Nornen in der letzten Szene erscheinen lässt.

Diese dramatische Wiederherstellung der altnordischen Völsungasaga von Fouqué hat wahrscheinlich Einfluss auf Richard Wagner ausgeübt, dessen Onkel Adolf mit Fouqué eng befreundet gewesen war. Das versteht sich daraus, dass Wagners Musikdramen 》Siegfried《 und 》Götterdämmerung《 fast die gleichen Handlungen haben wie Fouqués Werk. Dieses Heldenspiel, von Richard Wagner übernommen, ist ein wichtiger Gedenkstein in den Überlieferungen der Nibelungensage.

はじめに

フリードリヒ・ド・ラ・モット・フケー (Friedrich de la Motte Fouqué, 1777-1843)は、ドイツ文学史の上では後期ロマン派に属する詩人である。彼は少年の頃から古代ゲルマンの神話及び英雄伝説に親しんでいたが、1803年にフリードリヒ・シュレーゲル刊行の雑誌「ヨーロッパ」に戯曲小品『鍛冶屋におけるジークフリート』(Siegfried in der Schmiede) を発表してから、ますますニーベルンゲン伝説にも専念するようになった。今や彼はスウェーデン語、デンマーク語及びアイスランド語を学び、『スノリのエッダ』(Snorra-Edda)をレーゼニウス版 (1665年) で研究し、さらにはドイツ中世の英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』(Das Nibelungenlied) をも知った。この頃すでに『歌謡エッダ』(Lieder-Edda) や『ヴォルスンガ・サガ』(Völsungasaga) などにもかなり精通していたことは容易に推測されよう。他方ではアイスキュロスの悲劇研究によって戯曲への関心も高まり、1807年にはニーベルンゲン伝説の戯曲化を思い立つに至った。この戯曲の執筆は、当時精力的にニーベルンゲン研究に取り組んでいたフォン・デア・ハーゲンなどの影響もあって着々と捗り、1808年にベルリンのヒッツィヒ社から出版される運びとなったのが『大蛇殺しのジグルト』(Sigurd, der Schlangentöter) である。予想以上に大きな好評を博したので、大急ぎでフケーは1809年5月までに第二部として『ジグルトの復讐』(Sigurds Rache) を、そして第三部として『アスラウガ』(Aslauga) を仕上げた。こうしてこれら三つの作品は翌年1810年に『北欧の英雄』(Der Held des Nordens) という表題を持つ三部作として、同じヒッツィヒ社から出版されたのである。

我々が本稿で取り扱うのはその三部作のうちの最初の作品『大蛇殺しのジグ

ルト』[1] である。「六幕の英雄劇」(Ein Heldenspiel in sechs Abenteuern) という副題がついているが、その全六幕の前に序幕 (Vorspiel) が添えられている。フケーはこの序幕を書くにあたって、ジグルト (Sigurd) の祖先であるヴォルスング一族 (Wolsungen) の物語――北欧の『ヴォルスンガ・サガ』ではヴォルスングを中心にしてその先祖と子孫の物語が詳しく語られている[2]――については一切を省き、主人公ジグルトがヒィヤルプレク王 (Hialpreck) のもとで鍛冶屋ライゲン (Reigen) を養い親として育てられている場面から始めている。そして第一幕から第六幕においてはジグルトが大蛇を退治して、ヒンダルフィアルでブリュンヒルドゥルと婚約したのち、ライン河畔ヴォルムスでギューケ一族の謀略により暗殺されて、揚げ句の果てには薪の山でブリュンヒルドゥルとともに焼かれるまでの悲劇を取り扱っている。まさに『ヴォルスンガ・サガ』第13章以下において展開されているのと同じ北欧的な特徴を示すニーベルンゲン伝承であり、やがてのちにはリヒャルト・ヴァーグナーに大きな影響を与えて、その楽劇『ニーベルングの指環』四部作の重要な素材の一つになったことは十分に考えられることである。本稿ではこのフケーの戯曲とヴァーグナーの四部作との類似性を指摘することも一つの目的であるが、それよりもまず主な目的はこの作品に織り込まれているさまざまな素材を確認することである。フケーはどのようなニーベルンゲン素材を駆使して自らの戯曲作品を作り上げていったのであろうか。以下では、その諸々の素材を確認しながら、戯曲のあらすじを順に辿ることによって、フケーの戯曲作品としての特質を探り出すことにしよう。

序幕

まず序幕で取り扱われているのは名剣グラムル (Gramur) のエピソードである。この名剣は英雄ジグルト (Sigurd) がのちに大蛇退治を果たすためには無くてはならないものであり、序幕は鍛冶屋ライゲン (Reigen) がその名剣を鍛え上げようとしている場面でもって始まっている。ライゲンは何度もそれを試みるが、名剣はなかなか思い通りに仕上がらない。腕白少年ジグルトが剣を手

---

1) テクストには》Walther ZIESEMER (Hrsg.): Fouqués Werke, Zweiter Teil. Der Held des Nordens. Deutsches Verlagshaus Bong & Co.《を用い、邦訳は拙訳を試みる。

2) 菅原邦城訳：ゲルマン北欧の英雄伝説――ヴォルスンガ・サガ　東海大学出版会 1979年1-35頁（第1-12章）参照。

にして試してみるや、剣はすぐに折れてしまうのである。それでもライゲンは名剣を鍛え上げようと必死になっている。ヴァーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』四部作中の『ジークフリート』第一幕冒頭[3]を彷彿とさせるが、鍛冶屋ライゲン（ヴァーグナーではミーメ）がこうして丈夫な剣を鍛え上げようと必死になっている背景にはそれなりの魂胆があるのであり、それはライゲンが鍛冶仕事に励みながら独りつぶやく言葉からも容易に読み取ることができる。

Das ist die allerbeste Heldenwaffe,
Die mein geübter Arm zu schmieden weiß,
Und, denk' ich, mein unbänd'ger Zögling soll
An der doch endlich sein Behagen finden.
Hei, welch ein hochgemutes Heldenkind!
Gewiß verhilft mir der zu Faffners Schatz,
Dem teuern Goldeshort auf Gnitnaheide.
Zwar wird er ihn für sich behalten wollen,
Doch meistr' ich dann den wilden Degen wohl. (28-36)

これは俺の熟練した腕が鍛え上げることのできる
このうえない最良の英雄の武器だ。
俺が育てた手に負えない少年は、いいかげんに
この武器に満足すべきだと思う。
ああ、なんと高慢な英雄の少年なんだ！
彼が俺の手助けをしてファフナーの財宝、
グニトナハイデの高価な黄金をもたらしてくれることは確かだ。
彼はそれを自分のものにしようとするだろうが、
しかし俺があとでその乱暴な勇士を制するのだ。

鍛冶屋ライゲンの魂胆は、要するに、グニトナハイデ (Gnitnaheide) の丘で大蛇に変身してファフナー (Faffner) が護っている財宝を取り戻すことにある。ジグルトの養い親としてこれまで彼が少年にさまざまな知識を授けたり、いろいろな武芸を教えてきたりしたのも、結局のところジグルトに大蛇を退治して

3）三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳：ワーグナー『ジークフリート』（舞台祝祭劇『ニーベルングの指環』第２日）白水社1994年 6-9頁。

もらうため[4]である。そのためには丈夫な剣が必要であり、ライゲンはジグルトを巧みに騙(だま)して、丈夫な剣を鍛え上げようとしているのである。このように養父が少年のために名剣を鍛え上げるエピソードを伝えているのは、実はドイツの伝承ではなく、北欧の伝承である[5]。その件(くだり)は『歌謡エッダ』中の「レギンの歌」[6]と『スノリのエッダ』[7]ではごく簡単にしか伝えられていないが、『ヴォルスンガ・サガ』では第15章[8]において詳しく語られていることを考慮に入れると、フケーが序幕で名剣グラムルのエピソードを書くにあたって主な素材として用いたのは、恐らくこの北欧の『ヴォルスンガ・サガ』であったと推測してよいであろう。

こうして鍛冶屋ライゲンがひとまず剣を鍛え上げ、それを冷ましているところへジグルトが戻って来るが、そこで交わされる二人の会話も『ヴォルスンガ・サガ』第13章[9]に基づくものである。ライゲンは、すなわち、「強くて若い勇士」(65)のジグルトがヒィヤルプレク王のもとで「忍耐強く、静かに小姓として馬の世話をしている」(65-6)ことを不思議に思い、そのことをジグルトに尋ねたり、「父ジークムント(Siegmund)が遺した豊富な黄金」(73-4)のことを尋ねたりするが、この二つの質問は、順序こそ逆であれ、まさに『ヴォルスンガ・サガ』第13章に見出され、それ以外の作品ではどこにも見出されないものである。しかも『ヴォルスンガ・サガ』ではそのあと名馬グラニに関する叙述が続いているように、フケーの戯曲でもそのあとに続いて語られているのはまさにその名馬グラニ(Grani)の由来である。すなわち、「気高い、丈夫な馬グラニ」(100)を手に入れるよう忠告したのは誰かと尋ねる養父ライゲンに対して、ジグルトは「馬を要求するように勧めたのはお前だが、馬の群れから選ばせてくれたのはヒィヤルプレクの自由な寛大な心だった」(102-4)と答えて、その折

---

4) このことはのちにジグルトの母ヒオルディーザがライゲンに向かって言う言葉(313-4)からも明らかである。

5) しかも北欧の伝承ではその名剣は大蛇退治と結びついている。それに対してドイツの伝承——例えば、16世紀の韻文『不死身のザイフリート』や17、18世紀の民衆本『不死身のジークフリート』——では腕白少年を厄介払いするために鍛冶屋の親方が少年を竜の棲む森へ遣わせるのであり、竜(大蛇)退治と名剣は結びついていない。

6) 谷口幸男訳:エッダ——古代北欧歌謡集 新潮社1973年 133-7頁。

7) Gustav NECKEL/Felix NIEDNER (Übertragen): Die jüngere Edda (Thule 20. Band) Eugen Diederichs in Jena 1925. S.187.

8) 菅原邦城訳:前掲書43-5頁。

9) 菅原邦城訳:前掲書36-9頁。

りのことを次のように物語るのである。

Daß mir der hohe Greis, der unbekannte,
Seltsam geschmückt, einäugig, ernst, erschien,
Als ich zur Wahl hinausging; mir gebietend,
Die Rosse zu der Seeflut Busiltiorns
Zu treiben.— Ho, wie wurden alle scheu!
Nur eins, ein aschgrau, freudig junges Tier
Durchbrach die Wogen als im leichten Spiel.
Den wähle, sprach der Greis, und pfleg' ihn gut,
Von Odins Pferde Sleipner stammt er ab,
Wert, dich, mein tadelsfreier Held, zu tragen.—
Der Greis verschwand, und so war Grani mein. (106-16)

僕が馬を選びに出かけて行ったとき、奇妙に着飾り、
片目で、厳格な、背の高い、見知らぬ老人が、
僕の前に現われ、馬の群れをブジルティオルン川の
流れのところまで追い立てるようにと
命じたのだ。—— ああ、すべての馬はなんと怯(おび)えたことか！
ただ一頭だけ、灰色の、喜ばしいほど若い馬だけが
たやすい遊びのように波の中を泳ぎ抜いたのだ。
老人は言った、その馬を選び、その世話をよくするのだ、
それはオーディンの馬スライプナーに由来し、
申し分のない英雄よ、お前を乗せるにふさわしいのだと。——
老人は消えてゆき、こうしてグラニは僕のものとなったのだ。

オーディン (Odin) の名馬スライプナー (Sleipner) については、確かに『歌謡エッダ』中のいくつかの歌謡においてその名前が挙げられている[10]が、しかし、その名馬がニーベルンゲン伝説の英雄ジグルトの馬に結びつけられているのは、『ヴォルスンガ・サガ』第13章においてのみである。さらにブジルティオルン川 (Busiltiorn, 109) という名称も『ヴォルスンガ・サガ』以外では見られ

10) 例えば、「グリームニルの歌」第44詩節 (谷口幸男訳：前掲書56頁)、「パルドルの夢」第2詩節 (同上書 199頁) 及び「ヒュンドラの歌」第40詩節 (同上書 211頁) 参照。

ないことを考慮に入れると、フケーがここで『ヴォルスンガ・サガ』第13章を参照していることはもはや疑いない。このようにフケーの序幕では物語の筋が展開するというよりも、名剣を鍛え上げるエピソードの中で登場人物たちの会話によって北欧伝承の背景が明らかにされているのであり、筋の展開に直接関係のないエピソードを至るところに織り込んでいるところにフケーの特徴があると言ってよいであろう。

このような脇道にそれることを物語っているうちに筋の展開の中心にある剣の方もその熱から冷めたので、ジグルトはそれをライゲンから受け取って試してみるが、またもや剣は「イグサの作り物」(154) のように砕けてしまった。ジグルトは怒り、その目は「恐ろしい火のように燃えている」(161) ので、ライゲンはついに逃げ出してしまう。ジグルトはそのあとを追いかけようとする。そこへ現れてジグルトを引き止めたのが彼の母ヒオルディーザ (Hiordisa) である。母は怒る息子を宥(なだ)めて、外套の中から壊れた剣を取り出しながら言うには、

> Sieh, das war deines Vaters Siegmund Schwert,
> Gramur genannt, davon viel Lieder singen. (207-8)
>
> ごらん、これがお前の父ジークムントの剣だったのです。
> グラムルと呼ばれ、多くの歌に歌われています。

この場面は『ヴォルスンガ・サガ』第15章[11] を下敷きにしているが、このあとその名剣グラムルの由来について母が語る場面は『ヴォルスンガ・サガ』第3章[12] の叙述をそのまま踏襲している。

> Der's ihm verlieh, Odin, sein Götterahn.
> Beim frohen Hochzeitmahl in Wolsungs Hallen
> Erschien ein hoher Greis, einäugig, fremd
> An Tracht und Bildung —— (210-3)
> 。。。
> In eines Baumes mächt'gen Stamm,
> Der in der Halle stand, die Burg beschattend,
> Weit übers hohe Giebeldach hinaus,

11) 菅原邦城訳：前掲書43-5頁。
12) 菅原邦城訳：前掲書 5-7頁。

In dieses Baumes Stamm bohrt' er ein Schwert,
Sprach: wer's herauszuziehn vermag, behalt's!
Verschwand.— Viel Herrn versuchten es umsonst.
Dein Vater, seiner Heldenkraft vertrauend,
Ging allerletzt hinzu und nahm es hin.
Nun siehst du hier der edlen Waffe Trümmer;
Denn in der Schlacht, wo Lingos Übermacht
Mit Siegmunds tapferm Mut den Streit begann,
Trat deinem Vater, wie er durch die Scharen
Des Feindes brach, zum Kampf der Greis hervor. (215-27)

父上にそれを与えたのは、神々の祖先オーディンです。
ヴォルスングの広間で催した楽しい結婚式に
背の高い、片目で、衣服も身なりも見かけぬ
一人の老人が現れたのです——
・・・
大きな幹の木が、
広間の中に立ち、館を日陰にしながら、
高い切妻屋根の上に突き出ていましたが、
その木の幹に彼は剣を突き刺して、
これを引き抜いた者に与えようと言い残して、
立ち去ったのです。——多くの男たちが試みましたが、無駄でした。
お前の父さんが、自らの英雄の力を頼りにして、
最後に試して、それを引き抜いたのです。
さあ、ここにある気高い武器の破片をごらんなさい。
傲慢なリンゴと勇敢なジークムントが
戦い始めた決闘で、
敵の群れの中を駆け抜けた
お前の父さんの前に、あの老人が立ちはだかったのです。

これに続いて、ジークムントがリンゴ王 (Lingo) との戦いに負けて、妻ヒオルディーザがそこへ駆けつけた場面を語る言葉は、『ヴォルスンガ・サガ』第12章[13)]

13) 菅原邦城訳：前掲書32-3頁。(ただし、リンゴ王は『ヴォルスンガ・サガ』ではリュングヴィ王となっている)

に基づくものである。

Ich schlich zu Nacht aufs Feld des heißen Kampfs.
Noch lebend fand ich deinen Vater, lebend,
Doch schon an seines blut'gen Todes Tor.
Er sprach: du trägst in deinem Schoß ein Kind,
(Das warst du, Sigurd!) trägst ein Heldenkind,
Preis der Wolsungen, aller Zeiten Loblied,
So fern und weit die deutsche Zunge tönt. (234-40)
・・・
Dann gab er mir die Trümmer dieses Schwerts,
Und sprach: bewahr' sie wohl. Die beste Waffe
Wird man draus schmieden, meines Sohnes Werkzeug
Zu großer Tat.— Sein letztes war dies Wort.
Die Sonne stieg herauf und fand ihn kalt. (242-6)

私は夜にこっそりとその激しい戦いの場に出かけました。
するとお前の父さんはまだ生きていて、息をしていましたが、
すでに瀕死の状態でした。
父さんはこう言うのです、私の胎内には一人の子供、
（それがお前だったのです、ジグルトよ！）勇敢な子供が宿っている。
ヴォルスング族の賞賛の的となり、いつの時代にも
遠く離れた所でもその子供はドイツ語で褒め称えられることだろう。
。。。
それから彼は私にこの剣の破片を渡して、
大切に保管しておくようにと言ったのです。最高の武器が
この破片から鍛え上げられるだろう、偉大な行為のための
息子の剣が。―― これが最後の言葉だったのです。
太陽が昇ると、彼は冷たくなっていたのです。

このようにフケーはこの場面でジグルトの母ヒオルディーザを登場させて、昔の物語を語らせることにより、『ヴォルスンガ・サガ』の中でバラバラに語られていたいくつかの物語を巧みに名剣グラムルのエピソードに結びつけているのである。

こうして父ジークムントの最期の話を聞いて、その剣の破片を受け取ると、ジグルトは逃げていたライゲンを呼び戻して、その破片を繋ぎ合わせるように頼む。この剣の破片を見て、ライゲンも今度こそは名剣が出来上がることを確信して鍛冶仕事にいそしむ。その間、母親は息子がライゲンの鍛冶仕事を邪魔しないように息子を引き止めておいて、これから旅立って行く息子との別れを惜しむのであるが、この場面でもフケーは北欧の素材を用いている。グリーパー (Griper) ——『ヴォルスンガ・サガ』第16章[14] 及び『歌謡エッダ』[15] ではグリーピル——の予言がそれである。すなわち、母が息子の将来を予言して、魔法の飲み物が一人の若い、気高く美しい英雄を待ち受けており (367-8)、「この英雄の花が早く色あせたら、悲しいことです」(376-7) と言うと、ジグルトは叔父グリーパーの予言を持ち出して、こう答えるのである。

Sie wird es, Mutter. Meines Oheims Mund,
Des weisen Gripers, da an dessen Hof
Ihr jüngst mich hingesandt, entdeckt' es mir. (379-81)

この花はそうなるでしょう、母上様。僕の叔父、
つまりその館にあなたは最近僕を遣わせましたが、そのときに
あの賢いグリーパー叔父さんが僕にそのことを悟らせてくれたのです。

この息子の言葉に対して母ヒオルディーザが「お前はそのような運命をそんなに陽気に見ているのか」(382) と尋ねると、ジグルトはこう答える。

Was sollt' ich nicht! Man lebt nur eine Zeit.
Doch was beständig lebt, den edlen Ruhm,
Verhieß er mir auf alle Zeit hinaus,
Ja auch im kurzen Lauf die glühnde Liebe
Zwei schöner Frauen — gibt es größres Heil? —
Nein, Mütterlein, sieh drum nicht traurig aus.
Schau' doch, wie alles draußen lustig blüht,
Der Frühling herhaucht durch den heitern Himmel,
Die Wogen walln, von Wind und Sonne wach,

14) 菅原邦城訳：前掲書45-6頁。
15) 谷口幸男訳：前掲書127-32頁。

Grün kühl die Wälder ob Gebirges Schlüften—
Allsamt die Welt ein heller Feiersaal,
Gruß spendend deines Sigurds erstem Zug. (383-94)

どうしていけないでしょう！人が生きるのも一度だけです。
しかし絶えず生きているもの、つまり、気高い名声を
叔父さんは僕に全生涯を通じて約束してくれました。
短い人生でも僕には美しい二人の女性の燃えるような愛が
与えられるとのこと——これ以上の幸せがあるでしょうか？——
いや、母上様、だからといって悲しく思わないでください。
外ではすべてが楽しく花咲いているのを見てください。
春は陽気な空を貫いて息を吹きかけ、
波は風と太陽に目覚めて波立ち、
山峡の上の森は緑で涼しい——
世界もろとも、明るい祝祭の広間は
あなたのジグルトの初めての旅立ちに挨拶を送っているのです。

北欧の英雄らしい精神が読み取られる部分であるが、北欧の素材においてと同様、ジグルトは自らの運命を知りながらも自分の短い人生を喜ばしく生き抜こうとしているのである。

そうこうしているうちに名剣はライゲンによってついに鍛え上げられた。ジグルトがそれを金敷に向かって試してみると、金敷は真っ二つに斬り裂かれた。待ちに待った名剣グラムルの完成である。若い馬グラニもジグルトの旅立ちを待ち望みながらいなないている (438-9)。ジグルトはこうしてリンゴ王への復讐とグニトナハイデでの大蛇退治を果たすため、ライゲンを伴って広い世間へと出かけて行くのである。

第一幕

第一幕はこうしてジグルトが大蛇退治のためにライゲンとともにグニトナハイデの荒野にやって来たところから始まる。第一幕で展開される物語の要は大蛇退治であり、その前に果たすことになっていた父の仇討ち、すなわち、リンゴ王との戦い——『ヴォルスンガ・サガ』第17章[16]では詳しく語られている

16) 菅原邦城訳：前掲書46-9頁。

――については、大蛇退治の前に交わすライゲンとの会話(507-17)、並びにそのあと姿を現す老人オーディンとの対話 (583-99) の中で簡単に語られているだけである。戯曲化に伴う結果であることは言うまでもない。

さて、ジグルトはグニトナハイデの荒野に辿り着くとただちに大蛇ファフナー[17]を退治しようとするが、ライゲンは逸るジグルトの心を押さえて、大蛇の恐ろしさを語って聞かせる。

Ich auf der ganzen Welt kenn' ihn am besten.
Ein Zaubrer ist er. Sein geraubtes Gold
Zu hüten, unzugänglich mir und alln,
Hat er sich in den furchtbarn Drachenleib
Geschmiegt, wacht ob den reichen Schätzen nun
Inmitten dieser öden Heide still. (485-90)

全世界で奴を最もよく知っているのはこの俺だ。
魔法使いだ、奴は。奪った黄金を
護るために、俺にも誰にも近寄ることのできないところで、
奴は恐ろしい大蛇の姿でとぐろを巻き、
この荒れ果てた荒野の真っ只中で静かに
莫大な財宝を見張っているのだ。

このように大蛇は「魔法使い」(486) であり、「誰にも近寄ることのできないところ」(487) に棲んでいるが、「夕暮れどきになると水を飲むために沼地まで這い出して来る」(495-6) という。そこでライゲンはジグルトに「そこの沼地に下りて行って、暗い洞穴の中に身を隠し、ファフナーがそこを這って来たときに、奴の身体に名剣を突き刺すのだ」(537-41) という助言を与えるのである。ところがジグルトにしてみれば、その「追い込み猟」(ein Treiben, 542) のような策略は気に入らない。馬に乗って戦うのが勇敢な領主の気高いやり方で、しかもそうして初めて最もすばらしい英雄行為も実現できるのだ (547-8) とジグルトは主張するのである。ライゲンとジグルトの間でこのようなやりとりをしている間に、藪の中ではもう何かが動いている (560) 気配がしたので、ライ

17) フケーは大蛇を表すドイツ語として Schlange や Schlangenwurm のほかに Drache をも用いているが、本稿では「大蛇」という訳語で統一することをお断りしておく。

ゲンは恐ろしくなって逃げ出してしまう。

そこで突然ジグルトの前に現れたのが一人の老人である。老人はライゲンの忠告通りに「洞穴に隠れる」(580) ことを助言するが、この場面でも北欧の素材が織り込まれている。すなわち、老人はジグルトとのやりとりの中でキンベル一族の海岸 (am zimbrischen Gestad', 583)[18] での出来事を話して聞かせるが、その内容は『歌謡エッダ』中の「レギンの歌」(後半部分)[19]、並びに『ヴォルスンガ・サガ』第17章[20] において語られているものとほぼ同じである。

Ich saß am zimbrischen Gestad'
Auf schroffer Meeresklippe, labte mich
Am Wolkenliede des gewalt'gen Sturms,—
Da flogen Segel übers Wasser her;
Legt an! Legt an! schrie's bange Schiffsgesind',
Jedoch ihr Herr, ein junger Degen, rief:
Spannt höher, höher mir die Segel auf!
Mich freut der Sturm in seiner lust'gen Kraft,
Wie er nach König Lingos Land uns jagt. (583-91)
。。。
Ich rief den Schiffern zu. Man nahm mich ein;
Da legte sich des Sturms zu wilder Hauch.
Man sprach: wie heißt du? Ich entgegnete:
Zu Wolsungs Zeiten Fiolnir, der Vielwisser;
Auch Nikar, der sich oft Verwandelnde. (593-7)

私はキンベル人の海岸の
険しい崖の上にすわって、
激しい嵐の雲を見ながら休息していた——
そのとき何艘かの船が海を越えてやって来た。
接岸！接岸！心配そうな船乗りたちはそう叫んだが、
若い勇士である船主は叫んで言った。

18) キンベル一族 (Zimbern,607) はゲルマン人の一部族である。なお、この部族名は『歌謡エッダ』と『ヴォルスンガ・サガ』には見出されない。
19) 谷口幸男訳：前掲書 133-7頁。
20) 菅原邦城訳：前掲書46-9頁。

「帆をもっと高く、もっと高く上げよ！
この嵐は有難い、喜ばしい力を与えてくれて、
リンゴ王の国へ我々を運んでくれよう」
・・・
私は船乗りたちに呼びかけた。私が船に乗ると、
激しく吹き荒れていた嵐はおさまった。
「お前の名前は？」と尋ねたので、私は答えた。
「ヴォルスングの時代には大変賢い男フィオルニルと呼ばれ、
しばしば姿を変える男ニッカルとも呼ばれた者だ」

このような以前の話をして、老人はちょうどその船に乗ったときと同じようにこの荒野でもジグルトのもとを去って行った。話の途中からジグルトは、この老人が神々の祖先オーディンであることをすでに悟っていた (599) が、老人が姿を消したのち、この老人こそいつも自らを助けてくれる連れ合い (608) であるとの認識を強くして、ジグルトはこの老人の忠告に従って大蛇退治のため洞穴に入って行くのである。

ジグルトがこうしてオーディンの忠告を受け入れて洞穴に身を隠すや否や、恐ろしい大蛇がゆっくりと這い出して来た。大蛇が自ら語っているように、夕暮れどきになったので、いつものように「小川で水浴びをしてくつろぐ」(620-1) ためである。大蛇はやがて洞穴に近づいてジグルトに脇腹を見せる。その瞬間、ジグルトは跳び出して大蛇に剣を突き刺す。大蛇自らが叫び声を上げているように、「ものすごい力」(643-4)だったので、ジグルトの剣は大蛇の鱗を貫いて (645-6)、深く突き刺さった。大蛇は斜面にころがり落ちて、死んでしまった。素材の『ヴォルスンガ・サガ』第18章[21]では大蛇（竜）が死ぬ前に、両者との間で長い会話が交わされて、ジグルトは大蛇から黄金の呪いを聞くことになっているが、フケーの戯曲ではその呪いの言葉をジグルトに話して聞かせる役割は、このあと登場するライゲンに移されているので、黄金の呪いについてはその箇所で述べることにしよう。

さて、そのライゲンはジグルトが大蛇を倒したのを見て取ると、突然跳び出して来て、黄金の保管場所に近づこうとするジグルトの前に立ちはだかる。素材の『ヴォルスンガ・サガ』第19章[22]と同じように、ライゲンは突然ジグルト

21) 菅原邦城訳：前掲書 49-54頁。
22) 菅原邦城訳：前掲書55-6頁。なお、このエピソードは『歌謡エッダ』(谷口幸男訳：前掲書 140頁）では辛うじて読み取られるだけである。

に対して兄殺しを責め始める（662;667）のである。大蛇殺しへの行為にジグルトを駆り立てておき（684）ながら、その行為のあとジグルトを責めるのは理不尽であるが、要するに、ライゲンの要求は黄金である。強いジグルトを相手に闘う意志もない（691）ライゲンは、「何を望んでいるのか」（692）と尋ねるジグルトに対して、次のように答えるのである。

's ist doch meine Erbschaft.
Den Vater schlugen ich und Faffner tot
Um's Goldes willen. Dann trieb Faffner mich
Von Gnitnaheide fort, lag als ein Drache
Grimm überm Gold,— nun ist er tot, ich Erbe. (694-8)

でもそれは俺の相続品だ。
俺とファフナーがその黄金のために
父を殺したのだ。その後ファフナーが俺を
グニトナハイデから追い払い、恐ろしい大蛇の姿で
黄金の上に横たわった —— 彼が死んだ今は、俺が相続人だ。

これに対してジグルトは、兄弟二人が「黄金のために父親を殺したのなら、二人には相続権はふさわしくない」（700-1）と言って、ほかの要求をするように伝える。するとライゲンは、『ヴォルスンガ・サガ』第19章[23]と同じように、大蛇の心臓を火であぶって、それを自分のところに持って来てくれ（707-9）と乞う。そこでジグルトはただちにその仕事に取りかかるのである。『ヴォルスンガ・サガ』ではレギン（ライゲン）の魂胆は明らかにされていないが、フケーの戯曲ではライゲンがジグルトを見送りながら、次のように自らの意図を明らかにしている。

Ja, tu so wohl! — Nun ist es mit ihm aus.
Des Drachenblutes trank ich schon, die Speise
Des Drachenherzens gibt mir Vollgewalt
Ob aller Zauberkunst, die Faffners war,
Und, Sigurd, Gnitnaheide wird dein Grab.

23) 菅原邦城訳：前掲書55-6頁。なお、『歌謡エッダ』（谷口幸男訳：前掲書140頁）ではレギン自身が切り取ることになっている。

Dann zieh' ich mit dem reichen Schatz hinaus,
In einen schönen Jüngling umgestaltet,
Gewinne mir der Fürstentöchter Preis
Zur Gattin.— Eine gibt's, die wohnt inmitten
Von einem Flammenzaun auf Hindarfiall,
Ein wunderschönes Bild, in Schlachten siegreich,—
Die Sterne lasen sie für Sigurd aus,—
Die nehm' ich mir. Hei, welch ein Hochzeitfest! (717-29)

そう、うまくやってくれよ！——彼はもうおしまいだ。
大蛇の血を俺はすでに飲んだし、大蛇の心臓を食べれば、
ファフナーのものだった魔法のために、
俺にはすごい力が与えられるのだ。
そして、ジグルトよ、グニトナハイデはお前の墓場となるのだ。
そのあと俺は財宝をたっぷり持って出かける。
美しい若者の姿にも変身して、
国王の娘を妻に貰い
受けるのだ。——ヒンダルフィアルの炎の垣根の中に
一人の女性が住んでいる。
戦いで勝利を収めた、すばらしい姿の女性だ——
運命の星は彼女をジグルトに定めたが、
彼女を俺が奪い取るのだ。ああ、なんとすばらしい結婚式だ！

ここでライゲンがヒンダルフィアルの女性まで狙っているとしたのは、フケーの創作と考えてよいであろう。従って、ジグルトがこのあと大蛇の心臓を食べて小鳥の言葉が理解できるようになったとき、小鳥から聞き知るのは、フケーの作品では「ライゲンを警戒せよ」という忠告だけである。『ヴォルスンガ・サガ』第20章[24]や『歌謡エッダ』中の「ファーヴニルの歌」[25]においてのように、ヒンダルフィアルの女性のことについては何も聞かないことになっている。つまり、まず一羽のツバメが歌う内容は次の通りである。

Da sitzt der Sigurd, あそこにジグルトがすわって、

24) 菅原邦城訳：前掲書57頁。
25) 谷口幸男訳：前掲書 141-2頁。

Schweißbegossen,	汗をかきながら、
Faffners Herze	ファフナーの心臓を
Bei Funken bratend.	火であぶっている。
Weise, spräch' ich, sei	私は言いたいのだが、
Der Ringzerspalter,	鎖を断ち切る者よ、賢くあれ、
Wenn sein Schwert jetzt	その剣が今
Schneidend wäre! (784-91)	よく切れるならば！

続いて別のツバメが歌うには、

Da liegt der Reigen,	あそこにライゲンが横たわって、
Bespricht sich mit sich,	独り言をつぶやいている。
Will täuschen den Mann,	彼を信用してきた男を
Der ihm vertraut hat.	欺こうとしている。
Wütig spricht er	怒って彼は
Falsche Worte,	偽りの言葉を口にして、
Will, boshafter Schmied,	嘘つきの鍛冶屋は、
Den Bruder rächen. (797-804)	兄の復讐をしようとしている。

『スノリのエッダ』[26] にはこれとよく似た歌謡が収録されていることを考慮に入れると、フケーはこの二つの詩を特に『スノリのエッダ』から引用したものと推定されるが、やがてヴァーグナーもフケーのこの詩作を利用したことは十分に考えられることである。いずれの作品においても、ジグルトはこの二羽の鳥の警告に従って、ライゲンを突き刺して殺害するのである。

ただフケーの戯曲では、ここでライゲンが息を引き取る前に、アサ神族の物語（848-907）を話して聞かせることになっている。彼が語るところによると、アサ神族のオーディンは、世界の広さを調べるために、ヘーニル (Hänir) とロキ (Loki) とともに旅に出かけた。彼らが泉の縁に辿り着くと、そこではカワウソが魚を釣っていた。ロキは小石を投げてカワウソの頭を砕き、カワウソと魚を持って立ち去った。彼らは小さな農家にやって来て、宿を貸してくれないかと願い出た。そこはフライトマール (Hreidmar) が息子たちファフナーとライゲンと一緒に住んでいた家であったが、フライトマールはその獲物が自分の

26) Gustav NECKEL/Felix NIEDNER (Übertragen): a.a.O., S.187f.

三番目の息子オッツル (Ottur) であることを悟ると、怒ってその代償として金の延べ棒を調達してくるように言いつけた。オーディンとヘーニルは人質として縛り付けられて、ロキが黄金の延べ棒を調達するために出かけて行った。広い世間へ出かけて行ったロキは、裕福な侏儒アンドヴァル (Andwar) をつかまえて、彼の黄金をすべて奪い取った。アンドヴァルは、新たに財宝を増やしてくれる指環だけは残しておいてくれと頼んだが、ロキは指環をも奪い取ったため、アンドヴァルはそれに呪いをかけた。その指環の持ち主は破滅するという呪い通り、ロキから指環と財宝を貰い受けたフライトマールは、息子たちに叩き殺された。フライトマールの息子たちファフナーとライゲンも今や二人とも荒野に倒れ死んでいる。恐らくはその黄金のためなのである。

以上のような話をライゲンは、息を引き取る前に、ジグルトに物語るのであるが、これは明らかに『ヴォルスンガ・サガ』第14章[27]からほぼそのまま引用されたものである。ただ『ヴォルスンガ・サガ』では大蛇殺しを唆すためにこの話をしたのであったが、フケーの戯曲ではこの話は大蛇殺しのあと、しかもライゲンが息を引き取る前に語られることになっている。しかしフケーがこのエピソードをここへ移したのも意図がないわけではない。フケーはこのエピソードを黄金の呪いに結びつけているのであり、その最後の部分は次のように語られている。

Hüt' dich, du Heldenkind,
Hüt' dich vorm herrlichen Hort!
Wahr' dich vor Andwars Ring!
Fluch dröhnt derb lastend
Drauf, reißt nach,
Nach in Reigens und Faffners Fall dich. (908-13)

お前、勇敢な少年よ、気をつけろ。
すばらしい財宝には気をつけろ！
アンドヴァルの指環には気をつけるのだ！
呪いがその上にはひどく重く
のしかかっており、
ライゲンとファフナーの死後はお前の番だ。

27) 菅原邦城訳：前掲書40-3頁。

北欧の素材をなるだけ多く織り込むという意図のために、ややもすれば均整を欠くきらいのあるフケーの戯曲構成にあって、この点はうまくいって劇的効果を上げている一つの例と言ってよいであろう。このように指環の呪いを巧みにジグルトの運命に結びつけている点がフケーの特徴であるが、しかし、ジグルトは、その脅迫のために財宝を手放したくはなかったので、結局は北欧の素材と同じようにグラニに財宝を積んで出かけることになるのである。その財宝をジグルトが運び出す仕事に取りかかろうとしているところで、第一幕が終わっている。

第二幕

続いて第二幕で取り扱われているのは、ブリュンヒルドゥル（Brynhildur）に関するエピソードである。ブリュンヒルドゥルはヒンダルフィアルの山上の館で鎧に身をかため、剣をそばに置いて眠っている。その回りを三人のノルンが歩き回っている。「運命を司る力」（Schicksals ordnende Mächte, 932）と呼ばれるこのノルンたちは、『スノリのエッダ』における第一部「ギュルヴィたぶらかし」第15章[28]に由来すると考えられるが、フケーはその素材をうまく利用して、三人のノルンたちにブリュンヒルドゥルの過去、現在そして未来の出来事を歌わせることによって、『歌謡エッダ』中の「シグルドリーヴァの歌」[29]や『ヴォルスンガ・サガ』第21章[30]で語られているエピソードに結びつけている。すなわち、「成ったもの」（das Gewordne, 944）を操ったヴルドゥル（Wurdur）によると、ブリュンヒルドゥルは年老いたヒアルムグンナル王（Hialmgunnar）と英雄アグナル（Agnar）との戦いで、オーディンの命令に逆らって後者の英雄に勝利をもたらしたので、オーディンの怒りにふれ、罰として魔法の眠りにつかされた。現在、その館の回りでは炎が荒々しく燃え上がり、炎が館の入口を閉じているので、それに近づく者は誰もいない。このような現在を歌っているのは、「いま生成しているもの」（das Werdende, 945）を操作しているヴェルダンディ（Werdandi）である。そして「これから生成するもの」（was kommen soll, 946）を知っているスクルト（Skuld）が語るところによると、自由で率直な英雄がその炎を通り抜け、館に入って来てブリュンヒルドゥルを目覚めさせることになっている。未来のノルンがこのように歌い終わると、現在のノルン

28）谷口幸男訳：前掲書 236-8頁。
29）谷口幸男訳：前掲書 143-8頁。
30）菅原邦城訳：前掲書 58-67頁。

によってその英雄がいま炎を通り抜けて館に辿り着いたことが明らかにされる。三人のノルンたちは過去、現在そして未来の出来事を語る役目を果たすと、消え去って行く。

その炎を通り抜けてブリュンヒルドゥルの館に辿り着いた英雄がジグルトであることは言うまでもない。『歌謡エッダ』中の「ファーヴニルの歌」[31]や『ヴォルスンガ・サガ』第20章[32]などによれば、ジグルトは小鳥の声に従ってこのヒンダルフィアルの山上にやって来ることになっているが、フケーの戯曲ではなぜ彼がここにやって来たのか、その動機については明らかにされていない。その点を除けば、あとの展開は北欧の素材とほぼ同じである。ただブリュンヒルドゥルの目覚めは北欧の素材ではごく簡単な叙述で済まされているのに対して、フケーの戯曲ではより詳しく感動的に語られていることは注目に値する。館に足を踏み入れたジグルトは、すなわち、若者が鎧を身につけ、深く眠っている姿を見つける。武装具を脱がせてやろうと、近づくと驚いてしまう。

O mir! Es ist kein Knab'! Ein Jungfräulein,
Das Abbild aller Huld und Liebsgewalt! (1012-3)

おお、なんということ！男ではない！乙女だ。
あらゆる恩寵と愛の力の似姿だ！

ヴァーグナーの楽劇『ジークフリート』第三幕におけるブリュンヒルトの目覚めの場面[33]を彷彿とさせるが、この英雄の驚きは北欧の素材には描かれていない。ヴァーグナーがこのフケーの作品を参照したことは十分考えられる。ただヴァーグナーではジークフリートの口づけによってブリュンヒルデは目覚めるのに対して、フケーの戯曲では英雄の驚きの声とともに次第にブリュンヒルドゥルは目をさますことになっている。彼女自ら、一瞬、むなしい夢（1014）かと思うが、やがて「目覚め」（Wachen, 1020）を意識する。この乙女の目覚めに感動して、「一度見開いたその目の光をいま閉じてしまったら、私は二度とうれしいことはあるまい」（1024-5）と叫ぶジグルトに向かって、ブリュンヒルドゥルは答える。

---

31) 谷口幸男訳：前掲書 142頁。
32) 菅原邦城訳：前掲書56-8頁。
33) 三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳：ワーグナー『ジークフリート』 141-2頁。

Du bist der Recke, der nie Furcht gekannt,
Sonst wärst du hier nicht, hättst mich nicht erweckt,
Und dein gehören dieser Schönheit Blumen.
Ich wach', ich lebe nun fortan für dich. (1026-9)

あなたは恐れを知らない勇士です。さもなければ、
あなたはここに来て私を目覚めさせはしなかったでしょう。
この美しい花はあなたのものです。
私は目覚め、私はこれからあなたのために生きます。

このような言葉を聞いて夢見心地のジグルトに対して、ブリュンヒルドゥルは再度はっきりと「私はあなたのもの、神々によりあなたに与えられたのです」(1035)と語って、これまでの経緯を語り始める。すなわち、自分をこの眠りにつかせたのは、不屈の戦闘勇気に怒りを示した神であり、その神罰により、恐れを知らない勇士が自分を目覚めさせるまで横になって眠っていたこと（1039-44）を語るのである。そして自分はアトリ王（Atli）の妹であること（1045）を知らせてから、最後にはジグルトのことをよく知っている（1050）と言って、これまでのジグルトの一連の冒険を言い当てる。ブリュンヒルドゥルがなぜジグルトの名前、両親、冒険のことを言い当てる[34]ことができたのか、不思議に思うジグルトに向かってブリュンヒルドゥルは、自分には豊かな知識が神々から授けられていることを明らかにする。

Merk' auf, mein junger Held, was deine Braut
Für reiches Wissen hegt. Viel Runen kenn' ich
Und brauche sie nach meinem Willen frei
Und nach dem Willen dessen, der mir lieb ist:
Siegrunen erst, zum günst'gen Lauf der Schlacht,
Aulrunen dann, das Gift aus Tränken meidend,
Brimrunen, Schiffern hülfereich im Sturm,
Limrunen, Rind' und Blättern eingegraben,

34) ドイツの伝承（16世紀の韻文や17、18世紀の民衆本）では、侏儒王オイゲルが英雄の名前や生い立ち、両親の名前などを言い当てることになっている。ニーベルンゲン伝説が北欧に伝承される際にこの役割はブリュンヒルドゥルに移されたのであろう。

Herstellend schwindender Gesundheit Kraft;
Malrunen, Sprüch' eingebend vor Gericht,
Zuletzt Hugrunen, um der Menschen Sinne
Huldreich zu lenken sich zu stäter Gunst. (1071-82)

わが若き英雄よ、あなたの花嫁がどのように豊かな知識を
持っているか、よく聴きなさい。私は多くのルーネを知っていて、
それらを私の意志に従って、そして私の好きな人の
意志に従って用いることができるのです。
まず戦いで好都合な成り行きを得るためには勝利のルーネ、
飲み物から毒を避けるためには麦酒のルーネ、
嵐で船を安全に守るためには浪のルーネ、
衰える健康の力を回復させるためには、
樹皮と葉に刻み込まれた枝のルーネ、
裁判に出す格言のためには雄弁のルーネ、
最後に人間の意識を慈悲深く自分に向けさせて、
常に恩顧を得るためには知恵のルーネです。

このルーネの教えが『歌謡エッダ』中の「シグルドリーヴァの歌」[35] 及び『ヴォルスンガ・サガ』第21章[36] に由来することはもはや指摘するまでもあるまい。不思議な女性をどのような名前で呼べばよいのかと尋ねるジグルトに、ブリュンヒルドゥルは「ジグルドリファ」(Sigurdrifa, 1091) と呼んでくれるように答えていることからもそれは明らかである。ブリュンヒルドゥルはワイン一杯の盃を持って来て、ジグルトに挨拶を送る。

Gruß dem Tage,
Gruß den Tagesstunden,
Gruß der Tagesdämmrung!
Günstigen Auges
Beschaut uns, ihr alle,
Spendet uns Schmausenden Sieg! (1095-100)

35) 谷口幸男訳：前掲書 143-8頁参照。
36) 菅原邦城訳：前掲書 58-67頁参照。

Gruß den Asen,
Gruß den Asynien,
Gruß der vielnutzenden Erde!
Beredsamkeit, Weisheit,
Spendet uns beiden,
Heilkräft'ge Händ' auf Lebenslang! (1101-6)

昼間に挨拶を、
昼間のひとときに挨拶を、
昼の黄昏に挨拶を！
恵まれた目で
あなた方は皆、私たちを見つめ、
私たちに楽しみの勝利を与えよ！

アサ神族に挨拶を、
アサ神族の女神たちに挨拶を、
大いに役立つ大地に挨拶を！
雄弁よ、賢さよ、
私たち二人に、
一生の間、直す力のある手を与えよ！

ヴァーグナーの楽劇『ジークフリート』第三幕におけるブリュンヒルデの目覚めの場面で彼女が最初に口にする挨拶[37]を彷彿とさせるが、フケーにおけるこのブリュンヒルドゥルの挨拶がヴァーグナーに少なからず影響を及ぼしたことは疑いないであろう。こうして飲み物を差し出されて挨拶を受けたジグルトは、それを飲んで彼女に「永遠の誠実」(1114) を誓う。ブリュンヒルドゥルもすべてを捧げることを誓うが、しかし同時に彼女は、ジグルトがやがて新たな冒険を求めて自分の寝床から世界へ旅立って行くことを知っている。「命じたら、私はとどまります」(1122) と言うジグルトに対して、彼女は運命が旅立ちを命じている (1122) と答え、彼に十項目にも及ぶ格言 (1125-59) を教え諭す。この格言も、数こそ異なるが、『歌謡エッダ』中の「シグルドリーヴァの歌」[38]及び

37) 三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳：ワーグナー『ジークフリート』 142-3頁。
38) 谷口幸男訳：前掲書 146-7頁。

『ヴォルスンガ・サガ』第22章[39]に由来することは、ほぼ同じ内容の格言であることからも明らかである。ただこのあと『ヴォルスンガ・サガ』ではシグルズとブリュンヒルトの二人が愛の誓いを交わすだけで、シグルズが指環を渡すのはその後の再会の折りであるが、フケーの戯曲ではこの場面でジグルトが永遠の愛のあかしとしてアンドヴァルの指環を渡すことになっている。それに対してブリュンヒルドゥルは、旅立って行くなら、自分の義兄であるハイマー王(Heimer) を訪ねなさいと指示する。それからジグルトは新婚の寝床へ彼女を伴って入って行くのである。

このあと舞台は一時的にギューケ王の城に変わる。その城庭で王妃グリームヒルドゥルが一人の侍女を従えて薬草を摘み取っている。この王妃がこれからのあらすじを展開させるうえでいかに重要であるかは、次第に明らかとなってくる。王女が薬草を摘み取っていると、やがて武器がガチャガチャ鳴る音が聞こえてくる。侍女が様子を見に出かけると、息子たちグンナル (Gunnar) とヘグネ(Högne)が旅から戻って来たところである。末子のグットルム(Guttorm)はまだ冒険を求めて遠い旅の途上にあるという。「何か世界では新しいことが起こりましたか」(1235)という母の質問に対して、息子たちはジグルトが大蛇を殺して、財宝を獲得したことが遠くまで噂となっていることを伝える。ここですでにグリームヒルドゥルは心の中で邪な考えを抱き始めていると言ってもよいであろう。息子たちの帰還を祝って翌日宴を催すことにするが、その際美しい妹グートルーナを部屋から出させることをグンナルが提案する。このあたりは『ニーベルンゲンの歌』のあらすじ[40]を彷彿させるが、フケーの作品では背後でグンナル王を操っている母親のグリームヒルドゥルが重要な役割を演じているのであり、この母親の企みによってその後のあらすじが大きく展開してゆくのである。

さて、一方ブリュンヒルドゥルのもとを離れて旅立ったジグルトは、彼女との約束通り、彼女の義兄ハイマー王の城にやって来た。そのためジグルトは、『ヴォルスンガ・サガ』第25章[41]と同じように、ここでブリュンヒルドゥルと二度目の婚約を交わすこととなり、戯曲の構成という点ではやや均整に欠けると言えなくもない。ただそれだけにフケーの関心を窺い知るうえで注目に値する

39) 菅原邦城訳：前掲書67-9頁。
40) ただし、『ニーベルンゲンの歌』でクリエムヒルトや美しい乙女たちを客人たちの前に召し出すようグンテル王に進言するのは、家臣のオルトウィーンである。(相良守峯訳：ニーベルンゲンの歌　全2冊　岩波文庫1955年　第 273-4詩節参照)
41) 菅原邦城訳：前掲書75頁。

箇所と言ってもよいだろう。とにかくジグルトはハイマー王の城にやって来て、そこに滞在することになるが、そのハイマー王にはアルスヴィン (Auswin) という名の息子がいた。ジグルトはこの息子とともに多くの狩人を引き連れて狩りに出かけたある日のことである。狩りから城に戻って来たとき、ジグルトは華麗な塔の窓辺に自分の鷹がとまって、好奇心の目で見つめていることに気がついた。ジグルトがその塔に登って窓から中を覗き込むと、館の中にいたのは愛しいブリュンヒルドゥルらしき女性であった。彼女は織物の上に身をかがめながら、ジグルトの冒険を芸術豊かに編んでいる。不思議に思って、ジグルトがアルスヴィンにその美しい女性について尋ねると、アルスヴィンは次のように答える。

's ist meiner Mutter und des Königs Atli
Huldreiche Schwester, Wunder aller Fraun.
Man heißt Brynhildur sie, weil Helm und Brünne,
Zusamt des Schildes Wucht und andrer Wehr,
Ihr liebster Schmuck seit ihrer Wiegen ist.
Meist wohnt sie auf der Burg zu Hindarfiall
Inmitten eines heißen Flammenzauns;
Ich weiß nicht, was ihr jetzt den Sinn verändert,
Daß sie im weiblich schmiegsamen Gewand
Dort oben weilt und still die Nadel führt. (1319-28)

彼女は私の母並びにアトリ王の
慈悲深い妹で、あらゆる女性の中でも特にすばらしい女性だ。
ブリュンヒルドゥルと呼ばれているが、それは鎧と兜が、
重い楯とほかの防具とともに、
揺籠にいる頃から彼女の最も好ましい飾りだったからだ。
たいていなら彼女は熱い炎の垣根の中にある
ヒンダルフィアルの城で暮らしているが、
どういうわけで彼女は今や心を変えて、
女性らしくしなやかな衣服を着て、あそこの上の館で、
静かに縫い針をしているのか、私には分かりません。

彼女はずっと前にここにやって来たのか (1329) と尋ねるジグルトに対して、

アルスヴィンはジグルト本人がここにやって来たほんのわずか数日前だ(1330)と答える。ジグルトは、「広い大地が育むすべてのものにもまして、彼女こそ先程まで自分の心を捉えていたと同じ女性である」(1331-3)ことを確信して、アルスヴィンから彼女の部屋に通ずるドアを教えてもらって、ブリュンヒルドゥルのもとに急ぐのである。

塔の内部の華麗な部屋の中で織物にいそしんでいたブリュンヒルドゥルは、ジグルトが姿を現すと、四人の侍女に大きな黄金の盃を持って来させて、客人にワインを差し出すが、どこかよそよそしいところがある。「そなたはどうして今日はそんなに厳格でよそよそしいのか」(1427) と尋ねるジグルトに向かって、ブリュンヒルドゥルは「将来、私たちを結びつけるような日が訪れることは決してない」(1435-6)と答えて、ジグルトがニフルンゲン族のグートルーナ(Gudruna) という女性に委ねられている (1441-2) という運命を教え諭すのである。これに対してジグルトは執拗にブリュンヒルドゥルへの愛を誓ったので、彼女もゆっくりと身を起こしながら彼に愛を誓って、言う。

Du bindest dich, du bindest mich zugleich,
Sei's an den Tod, doch bin ich dessen froh.
So bleibe denn, Andenken deiner Treue,
Der Andwars Ring an meiner Linken fest.—
Zu ew'ger Liebesflammen Brand verlobt
Das Weib aus Hindarfiall sich dir, du Held! (1463-8)

あなたは自分を縛りつけ、同時に私を縛りつけます。
死ぬことになろうとも、私はうれしく思います。
あなたの誠実のしるしとして、アンドヴァルの指環を
私の左手にしっかりとはめておきましょう。——
永遠の愛の炎にかけて、あなた英雄よ、
ヒンダルフィアルの女性はあなたに婚約を誓います！

こうして二人は熱い炎の中で一つに結ばれて、結果的には二度にわたって婚約を交わすこととなり、物語全体の劇的構成を壊しているとも言える。しかしフケーの関心は物語を劇的に展開させることよりも、北欧の素材を自らの戯曲の中にできるだけ多く織り込むことの方にあるのであって、北欧伝承を駆使して自らの戯曲を作り上げているところにフケーの特徴があると言ってもよいであ

ろう。北欧の素材においてと同じように、こうして二度にわたってブリュンヒルドゥルと婚約を交わしたジグルトは、ブリュンヒルドゥルの言葉に従って、ただちに彼女の義兄の館に戻って行って、それから英雄の習慣にならって世界へ旅立つことになるのである。こうして互いに別れたことが実は彼ら二人の悲劇の始まりでもあったのである。

第三幕

その悲劇のいわば「種子」が植えつけられるのが、ライン河畔ヴォルムスのギューケ王(Giuke)の城においてである。第三幕のあらすじは一部を除いてほとんどこのギューケ王の城で展開する。ギューケ王と王妃グリームヒルドゥルが丘の上で自分たちの国のことを話し合っているところに、一人の見知らぬ男がきらびやかな姿でこの国に到着したという知らせが届く(1526)。その異国の男が「人間というより気高い神々に似ている」(1727)という表現などから『ヴォルスンガ・サガ』第28章における同様の場面[42]を下敷きにしていることが明らかであるが、フケーはさらにその使者を介して異国の男をより詳しく描いている。すなわち、その使者が伝えるところによると、異国の男の背丈はギューケ王の息子たちよりも高く(1533-4)、目は灼熱のように輝き(1536)、甲冑と衣服は黄金のように明るく輝いている(1542)。乗っている馬も気高く快活で、灰色をしていて、姿もすばらしく、背中には主人のほかに多くの黄金をも積んでいる(1547-50)という。この報告を聞いたギューケ王は、「そういう者なら丁重に出迎えねばなるまい」(1551)と言いながら、王妃とともに丘を下りて行くのである。

この国に辿り着いた異国の男がジグルトであることは言うまでもない。ジグルトは出迎える老国王と王妃に挨拶を送り(1558-60)、愛馬グラニをあずけた(1572-5)あとで、無断で入国した厚かましさをなじるギューケ王に対して、次のように名乗るのである。

> Ich seh', du kennst mich nicht. Mein Nam' ist Sigurd,
> Mein Vater Siegmund. Solchen Stammes Kind
> Darf viel begehn, davor sich andre fürchten. (1584-6)

42) 菅原邦城訳：前掲書81頁。

お前さんは私を知らないようだな。私の名前はジグルト、
父はジークムントという。このような家系の子は、
多くの行為が許されており、それを他の者たちは恐れている。

「その名声は聞き及んでいます」(1588) と答えて、王妃グリームヒルドゥルは丁重に歓迎しようとするが、そこへ息子たちであるグンナルとヘグネが旅から戻って来て、両者との間に再び緊張した雰囲気が漂う。ヘグネが兄グンナルに向かって、

Bruder, schau' mir den;
Das muß ein toller Possenspieler sein,
Wo nicht, der frechste Bursch in allen Landen. (1603-5)

兄上、よく見ろ。
こいつはものすごいいたずら者に違いない。
こんな厚かましい奴はすべての国を探してもどこにもおるまい。

と言えば、続いてグンナルも挑発的な言葉を口にする。

Du ungebetner Gast, weißt du's noch nicht,
Daß uns dein Haupt um Schuld verfallen ist? (1606-7)

招かれざる客人よ、お前はまだ知らないのか、
お前の頭は俺たちの手に陥っているということを？

この緊張感の漂う場面は、北欧の素材においてはどこにも描かれていない。フケーの自由な創作部分と考えられなくもないが、ここではドイツ伝承の『ニーベルンゲンの歌』における同様の場面[43]が多少なりとも影響していると言ってもよいのではあるまいか。特にこの第三幕においては、実際のところ『ニーベルンゲンの歌』の影響がところどころで読み取られるからである。

43) 『ニーベルンゲンの歌』ではジーフリトの挑戦的な態度に対してメッツのオルトウィーンはその客人の挑戦に応じる態度を見せている。ただし、ハゲネやゲールノートはこの場面では事を穏やかに解決しようと努めている。(相良守峯訳：前掲書　第106-27詩節参照)

到着の際のこの揉め事に決着をつけるために、ジグルトはこのあとギューケ王の息子たちを相手に三つの競技をすることになるが、その三つの競技も『ニーベルンゲンの歌』におけるイースラントでの三種競技[44]を模倣したものである。もちろん『ニーベルンゲンの歌』とフケーの戯曲の間には多少の違いはある。グンテル王に扮したジーフリトがプリュンヒルトと三つの競技を競い合う『ニーベルンゲンの歌』においては、槍投げ、石投げそして幅跳びの順で競技が行われるが、フケーの戯曲で最初に行われる競技は石投げである。ヘグネがまずその競技を買って出て、それに挑むが、ジグルトの方がより遠くへ石を投げた。弟の恥辱をそそぐためグンナルも同様に石投げを試みるが、同じ結果となった。グンナルは二つ目の競技として槍投げに挑むものの、結果は同じで、しかもジグルトの槍にあたって地面に倒れてしまう。ジグルトの槍は楯の縁にあたっただけだったので、グンナルはことなきを得たが、グンナルが憤慨するのは言うまでもない。グンナルは三つ目の競技として格闘――『ニーベルンゲンの歌』における幅跳びに代わる競技――を要求する。ジグルトの方も「兄弟一緒になって私を襲うがいい」(1649-50) と答えて、二人の挑戦を受けることになる。この競技の間、異国の英雄の力を密かに褒め称えていたのが王妃グリームヒルドゥルである。彼女は侍女に飲み物を持って来させて、すでに自らの企みを画策し始めていたのである。「奴が息子たちを強いるのが、お前にはうれしいのか」(1654) と尋ねるギューケ王に対して、王妃グリームヒルドゥルは答える。

> Ja, weil auch er ein Sohn uns werden muß. (1655)
> ええ、彼もまた私たちにとっては一人の息子となるのですから。

まさにこの王妃の策略によって、その後のあらすじが展開してゆく。事実、三つ目の競技もジグルトの勝利に終わると、グリームヒルドゥルは彼に飲み物を差し出しながら、こう言うのである。

> Dir wird der König Giuke Vater sein,
> Ich Mutter, Brüder meine tapfern Söhne.
> Ja, höher ehren will ich dich, als sie. (1674-6)

---

44) 相良守峯訳：前掲書　第7歌章（第 425-467詩節）参照。

ギューケ王があなたの父となり、
私が母、そして私の勇敢な息子たちが兄弟となりましょう。
そう、私は息子たちよりもより高くあなたを尊敬しましょう。

王妃グリームヒルドゥルのこの言葉は『ヴォルスンガ・サガ』第28章における同様の言葉[45]を踏襲したものであり、フケーはここで再び北欧の素材に基づいて物語を展開させていることが明らかである。ただ『ヴォルスンガ・サガ』ではシグルズは王妃の差し出した飲み物で突然ブリュンヒルドのことを忘れてしまうのに対して、フケーの戯曲ではその記憶を失う過程が細かく描かれている。すなわち、ジグルトは王妃グリームヒルドゥルの差し出したその飲み物を飲むと、だんだんと記憶を失い始め、さらに王妃に勧められるままに、盃に残っているものをすべて飲み干してしまってからすっかり記憶を失ってしまうのである。

記憶を失ったジグルトは、これまた邪悪な王妃グリームヒルドゥルの誘導によってグンナルとヘグネに対して握手しながら誠実を誓う（1710-2）とともに、彼らを助けて戦争に出かける意志のあるところを次のように明らかにする。

Gibt's keinen Krieg, Ihr Herrn? Ich zög' am liebsten
Alsbald hinaus, beweisend, was ich kann;
Vielleicht dann sähen wir beim Siegesmahl
Gudrunens, der Niflungin, Schönheit leuchten,
Von der die ganze Welt bewundernd spricht. (1713-7)

皆さん、戦争はないのですか？私はすぐに出かけて、
私にできることを示したい気持ちです。
そうすれば私たちは勝利の宴席で、
全世界が賛嘆して語っている
ニフルンゲンの美しいグートルーネに出会えましょう。

これに対して王妃グリームヒルドゥルも「娘の恩寵で目の元気を回復するのは、それにふさわしい勝利の賞賛です」（1721-2）と答えて、ジグルトを巧みに操る。ジグルトが意気を高めてグンナル及びヘグネと腕を組みながら城へ入って

45）菅原邦城訳：前掲書82頁。

行ったあと、このような策略を用いた結末を心配するギューケ王に向かって王妃グリームヒルドゥルはこう言う。

Mein Trank hält viele Tage vor.
Was er auch mit des Leibes Augen säh',
Ihm bleibt das innre Auge doch gehalten,
Daß er ehmal'ger Wünsche nicht gedenkt.
Wir haben ihn. (1731-5)

私の飲み物は何日も長持ちします。
彼がたとえ身体の目で何を見ようと、
彼の内的な目はとらえられたままなので、
かつての望みを思い出すことはないでしょう。
私たちは彼を所有しているのです。

グリームヒルドゥルの画策がことごとくうまくいっていることを表す言葉である。あらすじはグリームヒルドゥルによって動いていることが明らかである。ここで場面は一時的にヒンダルフィアルの城に変わって、ブリュンヒルドゥルは一人武装して英雄ジグルトの帰りを待ち受けている (1737-67) が、もちろんこのような事態となったことはつゆほども知らない。彼女はすぐさま舞台から姿を消して行く。

舞台は再びギューケ王の城に戻って、華やかな宴の場面となる。ギューケ王と王妃グリームヒルドゥルはもちろんのこと、ジグルト、グンナルそしてヘグネはほかの英雄たちとともに宴の席についている。その宴の席でジグルトは盃よりも望んでいるものがあることをほのめかす(1773-5)。ヘグネがジグルトの心のうちを察して、「この宴席の明るいロウソクのもとで妹に会いたいのだろう」(1779-80) と言えば、ジグルトもそれに合わせてこう答える。

Ja, lieber Held, das hieß' ich mir ein Heil.
Seit jenem ersten Trank, den mir begrüßend
Die Kön'gin darbot, fehlt mir irgend was,
Als wär' ich nur ein halber Mensch; es liegt
Mein Trost vielleicht in deiner Schwester Augen. (1781-5)

そうだ、英雄よ。それを私は幸せだと呼びたい。
王妃が挨拶しながら私に差し出したあの飲み物を
最初に飲んだときから、私には何かが欠けている。
私はまるで半分の人間のようだ。私の慰めは
恐らくお前さんの気高い妹の目の中にあるのだろう。

これを聞いた王妃グリームヒルドゥルは、さっそく娘グートルーナを呼び寄せて、大蛇殺しの英雄ジグルトに挨拶させようとするのである。

こうしてギューケ王の娘グートルーナは初めて自分の部屋から出て来て男たちの前に姿を現すのであるが、この乙女の登場の場面においては『ニーベルンゲンの歌』第5歌章の抒情的な同様の場面[46]が少なからず影響を及ぼしていると言ってもよいであろう。「青い目を驚きの中で輝かせて、動きなくドアの前に立っている」(1800-2) 姿が「陽気な夏の日の明るい湖」(1803) だと形容されている「はにかみや」(1800) の乙女グートルーナは、今や英雄ジグルトに歩み寄って誉れ高い挨拶を送るのである。ギューケ王も、王妃グリームヒルドゥルの執拗な説得にあって、ついに娘グートルーナをジグルトの花嫁にすることを承諾する。王妃グリームヒルドゥルの言葉に従って、グートルーナはジグルトにキスをして、二人の結婚がここにめでたく実現する。今やニフルンゲン族の一員となったジグルトは、大蛇ファフナーから奪い取った財宝を義兄たちにも分け与えて、共同の所有とすることを誓う。「全世界の喜びがいま我々のところにある」(1899) とジグルトは言うが、しかし、すでに悲劇は始まっていたのである。

第四幕

こうしてグートルーナを娶ったジグルトは、ギューケ王の城に滞在し、やがて二人の間には息子[47]も生まれる。それから数年[48]が経過した頃から、第四幕のあらすじが始まる。ジグルトは手強い敵を倒したりして、グンナルとヘグネを助けていることは、冒頭での彼らとの会話 (1900-53) からも明らかである。

46) 相良守峯訳：前掲書　第 280-286詩節参照。
47) 第五幕におけるジグルトの言葉 (2774) から、名前は祖父に因んでジークムント (Siegmund) と名づけられていることが分かる。
48) 第六幕で彼の息子は3歳である (3426) とされていることからすると、3年と考えてよいだろう。

彼ら三人がそのように話しているところへ王妃グリームヒルドゥルが現れて、長男グンナルに花嫁を迎えるように勧める。素材の『ヴォルスンガ・サガ』第28章[49]とほぼ同じ展開であるが、フケーの戯曲ではその勧めるさまがより詳しく描かれている。「あなたが私に選んだ女性とは誰ですか」(1966) とのグンナルの質問に対して、王妃グリームヒルドゥルはその花嫁について次のように語る。

Sie wohnt inmitten eines Flammenzauns— (1970)
・・・
Brynhildur heißt sie, König Budlis Tochter,
Und Atlis Schwester— (1972-3)
・・・
Wer durch den Flammenzaun hinsprengen darf,
Gewinnt sie sich. (1977-8)

彼女は炎の垣根の真っ只中で暮らしています——
・・・
ブリュンヒルドゥルと言って、ブドリ王の娘で、
アトリの妹です——
・・・
炎の垣根を飛び越えることのできる者が、
彼女を手に入れるのです。

母妃のこの言葉に刺激されて、グンナルはただちにブリュンヒルドゥルに求婚することを決意し、ジグルトに同行を求める。過去の記憶を失っているジグルトはそれをすぐに承諾するが、愛しい妻子とのつらい別れのことを考えて、別れの挨拶をせずに旅立つことにする。こうしてグンナルは弟ヘグネと義弟ジグルトを伴ってブリュンヒルドゥルへの求婚の旅に出かけるのである。王妃グリームヒルドゥルは、この求婚の旅が息子グンナルにはむずかしいことだとは最初から認識していたが、勇敢なジグルトの助けを当てにしているのであり、それはグンナルが首尾よく目的を果たして帰って来ることを約束して旅立って行ったあとで、彼女が次のように独りつぶやいていることからも明らかである。

49) 菅原邦城訳：前掲書83-4頁。

Will's wünschen. Schwierig zwar
Ist ihre Fahrt. Jedoch verlass' ich mich
Auf des Betörten sichre Heldenkraft.
Die Sterne sagen, kurzes Leben nur
Sei ihm beschieden; um so schneller nutz' ich's. (2032-6)

私もそれを望んでいるよ。彼らの旅は確かに
むずかしい。しかし私はあの惑わされた英雄の
確実な力を当てにしているのだ。
星の占いによると、彼は短い生涯の運命だと
定められているので、それだけ早く彼を利用することにしよう。

このように王妃が独りつぶやいているところへギューケ王が現れて、息子たちがブリュンヒルドゥルへの求婚のために旅立ったことを聞き知ると、彼はその求婚に不安を抱き、それが国を滅ぼす結果になることを恐れるが、王妃グリームヒルドゥルは逆にその結婚がニフルンゲン族により多くの力をもたらしてくれることを固く信じて、次のように答える。

Ich will noch die Niflungen leuchten sehn
Vor allen Helden in der ganzen Welt. (2053-4)

私はニフルンゲン族が全世界のすべての英雄
にもましてなおも光り輝くのを見たいのです。

『ヴォルスンガ・サガ』においても王妃は確かに邪悪な女性として描かれている[50]が、しかし、フケーの戯曲ではより邪悪で、より権力欲の強い女性として描かれていることが明らかである。第四幕のあらすじはことごとくこの邪悪な王妃グリームヒルドゥルによって操られていることが、理解できるであろう。

さて、場面は変わってヒンダルフィアルの前の空き地。遠くには炎に囲まれた城が建っている。その中でブリュンヒルドゥルは暮らしている。『ヴォルスンガ・サガ』第29章[51]においてと同じように、グンナルは自分の牝馬ゴーテ(Gote)

50) 例えば、第26章ではグリームヒルドは「魔法使い」と表現されて、そのあとではっきりと「邪な心の女だった」と記されている。(菅原邦城訳：前掲書76頁参照)
51) 菅原邦城訳：前掲書84-5頁。

に乗ってその炎を飛び越えようとするが、馬は炎の前で狂ったようにあとじさりする(2106)。引き返して来たグンナルはジグルトに頼んでグラニを貸してもらい(2113)、再度その炎を乗り越えようと試みても、やはり無駄であった。グラニはグンナルが近づくと、狂ったように、たたいたり、かみついたり、なぐったりする (2125-6) のである。そこで『ヴォルスンガ・サガ』第29章[52]では母妃の教えに従ってシグルズとグンナルが姿を交換することがごく簡単に語られているが、フケーはこの場面を敷衍している。すなわち、まずジグルト自らが出かけることを提案する (2132) が、「私自身が炎を乗り越えない限り、花嫁を得ることはできまい」(2133-4) とグンナルが言うのを聞いて、口を開いたのがヘグネである。ヘグネはあるときひどい傷を受けて横たわっているときに、母親グリームヒルドゥルから教えてもらった魔法のことを明かすのである。それによると、魔法によって二人の人間が姿を交換することができるというものである。その技を使ってジグルトがグンナルの姿で城に飛び込んで行く (2151-2) ことをヘグネは提案するのである。ジグルトはただちにそれを承諾するが、グンナルには一つ気に入らないことがある。ジグルトが城に入って行けば、美しい女性たちが彼に好意を抱き(2161-2)、そのうちブリュンヒルドゥルもジグルトに身を捧げることになる (2163) ことを心配するのである。そして「最初にほかの男に愛を捧げたような乙女は花嫁にしたくはない」(2164-5) とさえ言う。それを聞いたジグルトは、彼女に決して触れはしない (2167) ことをグンナルに約束しながら、こう言う。

Hör', ich besteig' mit ihr das Hochzeitbett,
Doch Gramur leg' ich, mein zweischneidig Schwert,
Als Trenner zwischen uns. Fragt sie, warum,
So sprech' ich: ernster Weissagung Gebot
Halt' in solch strengen Banden meine Freude,
Die ersten Nächte nach dem Ehebund,
Sonst droh' erzürnt mir das Geschick den Tod.
Bist du damit zufrieden? (2173-80)

聞いてくれ、私は彼女とともに婚礼の床につくが、
私の諸刃の剣グラムルを私たちの間に

52) 菅原邦城訳：前掲書85頁。

隔てるものとして置くことにする。なぜかと彼女が尋ねたら、
私は答えよう。厳粛な予言の命令が
そのような厳格な絆においては、
婚礼のあとの初めての夜には私の喜びを抑制する、
さもなければ、運命が怒って私に死をもたらすのだと。
そういうことでいいですか？

グンナルはこれをしぶしぶ承諾したので、さっそくヘグネは剣でしるしを空中に描きながら、姿交換のまじないを唱え始めた。しばらくしてまじないが終わると、ジグルトはグンナルの姿で現れた。グンナルもやがてジグルトの姿で現れ、王妃グリームヒルドゥルの魔法のまじないが実証されたのである。ジグルトはさっそくグンナルの姿で炎を突き抜けて城に飛び込むことに成功する。そのさまを見てグンナルが足を踏みならしながら、悔しがる様子が描かれている。ヘグネがグンナルに義弟の言葉を信じるように慰める。このようにジグルトがブリュンヒルドゥルの城に入って行くときの嫉妬深いグンナルの心理が詳細に描かれているところに、フケーの戯曲の特徴があると言えよう。

さて、ジグルトがヒンダルフィアルの城の中に入ると、ブリュンヒルドゥルは武装してすわっている。この城での出来事についてもフケーは詳しく描いている。ヴァフルローガ(Wafurloga)と呼ばれる炎を飛び越えて来た英雄は誰かと尋ねるブリュンヒルドゥルに向かって、グンナル姿のジグルトは答える。

Gunnar, des Königs Giuke ältster Sohn.
Mit deines Vaters Willen, und deines Schwagers,
Des Königs Heimer, komm' ich, dich zu frein. (2285-7)

グンナル、ギューキ王の長男だ。
そなたの父、そしてそなたの義兄ハイマー王の
意志により、私はそなたに求婚するため、ここに来たのだ。

ヴァーグナーの楽劇『神々の黄昏』第一幕における同様の場面[53]と同じように、フケーの戯曲でもブリュンヒルドゥルはためらいを隠しきれない。ヴァフルローガの炎を乗り越えてここにやって来ることができるのは、あらゆる男た

53) 三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳：ワーグナー『神々の黄昏』(舞台祝祭劇『ニーベルングの指環』第3日) 白水社1996年54-9頁。

ちの中でも最も優れた英雄だけであるが、グンナルがその優れた勇士であるはずはない。しかし、グンナルが炎を乗り越えてここに来ていることもまた事実である。ブリュンヒルドゥルは複雑な心境であるが、グンナルが勇敢な心を持つことを誓う（2317-8）と、グンナルの求婚に応じざるをえない。ついに「私はあなたのものです」(2319)と答えてその求婚に応じてしまうのである。ブリュンヒルドゥルはさらに自分の指にはめていた指環――それこそアンドヴァルの指環と呼ばれ、不吉な魔法を秘めていて丈夫なものであった(2321-2)――をジグルトから花嫁の贈り物として要求されて、ついにそれを渡してしまう。その代わりとして彼女は別の指環をもらうのである。アンドヴァルの不思議な指環を手にしたグンナル姿のジグルトは、自らの剣を見ながら自らに向かって言う。

> Ei, Gramur, schiedst so manchen Kämpfer schon
> Von süßer Lust des Lebens! — Heut auch mich
> Wirst scheiden von des Lebens süß'ster Lust;
> Jedoch ein edler Recke hält sein Wort. (2333-6)

> おい、グラムルよ、お前はすでに何人かの勇士を
> 人生の甘い欲求から隔ててきた！――今日もまた私を
> 人生の甘い欲求から隔てるのだ。
> 気高い勇士は約束を守るものなのだ。

このようにグンナルと取り交わしていた誓いを自らに言い聞かせながら、ジグルトは美しい優雅な婦人を連れて部屋に導き入れるのである。順序こそ多少の違いはあれ、ほぼ素材の『ヴォルスンガ・サガ』第29章[54]と同じ展開であり、そのさまがより詳しく描かれているところにフケーの特色があると言ってよいだろう。

このあとジグルトがグンナルと再び姿を交換してブリュンヒルドゥルを花嫁としてヴォルムスに帰還する場面も、『ヴォルスンガ・サガ』第29章[55]では簡単な叙述で済まされているのに対して、フケーではかなりの分量にまで敷衍されている。ちょうどヴァーグナーの楽劇『ジークフリート』第二幕でジークフリ

54) 菅原邦城訳：前掲書87-8頁。
55) 菅原邦城訳：前掲書88頁。

ートが使者として一足先にヴォルムスに到着する場面[56]に相当するが、フケーの戯曲ではヴォルムスで待ち受けているのは王妃グリームヒルドゥルとその娘グートルーナである。グートルーナは子供を腕に抱いて、ジグルトの帰りを待ちわびている。その子供についてグートルーナが王妃グリームヒルドゥルと話しているところへ、従者が現れてジグルトの帰還が伝えられる。グートルーナは大喜びでジグルトを出迎えるが、王妃グリームヒルドゥルはジグルトが一人で戻って来たことを咎める。王妃が息子たちのことを心配していることを悟ったジグルトは、首尾よく事が運んで、グンナルがブリュンヒルドゥルを花嫁としてまもなく戻って来ることを報告する。王妃グリームヒルドゥルとグートルーナは華やかに着飾って、出迎えの準備に取りかかる。やがて家来たちも集まると、塔の上から見張人の声が聞こえて、一行が戻って来たことが知らされる。ブリュンヒルドゥルは娘や従者と一緒に一行を出迎えに行くが、ジグルトは一人であとに残る。「なぜ私は一緒に行かないのか？何が私をここに引き止めるのか？」(2450)とジグルトは不思議に思っているうちに、だんだんと記憶が蘇ってきた。到着の人たちの中にブリュンヒルドゥルがいるのを見て、ジグルトは愕然とする。

Brynhildur kommt! — Brynhildur?
(bleibt plötzlich stehen.)
Die dort? Die ist es! Sigurdrifa war's!
War mein! Und was? Nun König Gunnars Weib?
Wart', Gunnar!
(er zückt das Schwert.)
Nein, o nein, der ist mein Schwager!
Was ist denn das! Nun wirrt sich's auf. O mir,
Mein süßes Lieb, Brynhildur! Weichend ziehn
Die bösen Nebel fort aus meinem Sinn!
Ach, wie so spät! Hab' nun ein andres Weib,
Hab' nun ein Söhnlein! Wär's doch all ein Traum!
Weckt mich! Ho, weckt mich! — Wehe mir, ich wache.
Verpfändet meine Lieb', mein Wort gebrochen,
Nun hält mich Treue hier, reißt dort mich hin.

56) 三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳：ワーグナー『神々の黄昏』 66-71頁。(ただし、ワーグナーの作品では待っているのはハーゲンである)

Ich bin verloren! —
Jetzt spür' ich es, mit argem Zaubertrank
Ward ich betört, gewann für andre die,
So all mein Leben war! — Still, Heldensohn,
Still, Wolsung! Trag', was nicht zu ändern steht. (2466-81)

ブリュンヒルドゥルが来た！——ブリュンヒルドゥル？
（突然立ち止まる）
あそこの女性が？彼女だ！ジグルドリーファと呼ばれた人だ！
私の人だった！それが何？今やグンナル王の妻？
待て、グンナル！
（彼は剣をさっと抜く）
いや、おお、いや、彼は私の義兄だ！
いったいどうしたのだ！今や混乱してきた。ああ、
私の愛しい妻、ブリュンヒルドゥルよ！邪悪な霧が
私の心から消え去った！
ああ、なんと遅かったことか！私は今ほかの妻を迎えている、
小さな子供までいる！すべて夢だったらよいのに！
目覚めさせてくれ！おお、私を！——ああ、私は目覚めている。
私は愛を質入れし、約束を破ってしまった。
今や誠実が私をここにとどまらせ、私を引き裂く。
私はもうだめだ！——
今や私は感じる、邪悪な魔法の飲み物で
私は惑わされ、他人のために彼女を手に入れたのだ、
私の人生のすべてだった女性を！——静まれ、英雄の子よ、
静まれ、ヴォルスングよ！変えられないことを耐え忍ぶのだ。

この場面は素材の『ヴォルスンガ・サガ』第29章[57]では簡単に一行程度で済まされているのに対して、フケーの戯曲ではジグルトの内面の葛藤が細かいところまで見事に描かれている。フケーの特徴がよく出ている箇所である。しかもジグルトのこの叫びの中には今にも不吉なことが起こりそうな気配を残しており、物語はいよいよ二人の女性の口論へとつながってゆくのである。

57) 菅原邦城訳：前掲書88頁。

第五幕

その「両王妃の口論」を取り扱っているのが第五幕である。この口論はのちにジグルト暗殺のきっかけとなるもので、ニーベルンゲン伝説ではいくつかのタイプ —— 口論のきっかけはさまざまであるが、その内容が夫の自慢であり、王妃の座をめぐっての争いであるという点では共通する —— が認められる。例えば、『ニーベルンゲンの歌』[58] では両王妃が騎士たちの競技を見ているときに口論を始め、それはそののち教会の入口で頂点に達する。また『ティードレクス・サガ』[59] では王妃ブリュンヒルトが広間に入って行ったときに、グリームヒルトが立ち上がって礼をしなかったことから口論が始まっている。これらに対してフケーの戯曲では『ヴォルスンガ・サガ』第30章[60] や『スノリのエッダ』[61] に基づいてライン河の中での口論となっている。すなわち、ある夕方、グートルーナとブリュンヒルドゥルがライン河に出かけたとき、ブリュンヒルドゥルが最初に河の中に入って髪を洗おうとすると、グートルーナはなぜかと尋ねて口論となるのである。ブリュンヒルドゥルはまず自分が王妃の身分であることを楯にして「先にあなたが洗った水で、王妃の私の頭を洗うのはふさわしくない」(2494-6) と主張すれば、グートルーナは自分も国王の娘である (2497-8) と言って反論する。するとブリュンヒルドゥルは「私こそ、とても強い国王の娘」(2498) であることを強調したうえで、夫のことを持ち出して「私こそ、ずっと気高い男性と結婚している」(2499) と主張する。これに対してグートルーナが「ジグルトこそ気高い人で、彼のような人はこの世にいない」(2500-1) と言って、夫の自慢をする。ブリュンヒルドゥルが「あなたの夫はヒィヤルプレク王に仕える家来である」(2505-6) ことを持ち出せば、グートルーナは夫の勇敢な冒険を自慢してこう答える。

Mit nichten; frei, ein königlicher Held,
Befehligt er das ganze Niederland.
Hältst du's für Weisheit, solchen Mann zu schmähn?
Den Faffner und den Reigen traf sein Schwert,

---

58) 相良守峯訳：前掲書　第14歌章参照。
59) Vgl.Fine ERICHSEN (Übertragen): Die Geschichte Thidreks von Bern. Thule 20. Band. S.371f.
60) 菅原邦城訳：前掲書 89-94頁。
61) Gustav NECKEL/Felix NIEDNER (Übertragen): a.a.O.,S.189.

Ihr wunderreiches Erb' gewann er sich. (2507-11)

決してそんなことないわ。もちろん、国王らしい英雄よ。
夫はニーデルラント全体を支配しているのだから。
そのような男性を罵って、あなたは賢いと思っているの？
夫の剣はファフナーとライゲンを倒し、
彼らの膨大な遺産を手に入れたのよ。

これに対してブリュンヒルドゥルも、自分の夫を自慢して言う。

Prahl' nicht mit seinem düstern Heidezug;
Denn höher war, ich schwör's bei allen Göttern!
Viel höher war des kühnen Gunnar Tat,
Als er durch Wafurloga zu mir ritt.
Man sagt, dein Sigurd war mit im Gefolg; (2512-6)

陰気な荒野での冒険のことなど自慢しないでよ。
すべての神々に誓って言うけど、私の夫こそ高貴だったのだから。
ヴァフルローガを通り抜けて私のところへやって来たとき、
勇敢なグンナルの行為の方がずっと高貴だったのよ。
あなたのジグルトは家来として従っていたと人は言っているわ。

このように口論はますます激しさを増していって、グートルーナはついに決定的な言葉を口にしてしまう。

Glaubst du denn, Gunnar ritt durch Wafurloga?
So glaub' ich, daß mit dir das Bett bestieg,
Der diesen Ring mir schenkte, Andwars Ring,
Zur Hochzeitgift von deiner Hand ihn nahm,
Als Runenkunst mit Gunnar die Gestalt
Ihm wechselte.— Schau' nur den seltnen Ring.
Sein köstlich Leuchten bleicht die Wange dir,
Versiegelt dir den freveln Mund. (2518-25)

グンナルがヴァフルローガを乗り越えたとあなたは思っているの？
あなたと一緒にベッドに入ったのは、この指環を私に贈ってくれた
男性だと私は思っているわ。このアンドヴァルの指環は、
その人がルーネの秘術でグンナルと姿を換えたとき、
結婚の贈物としてあなたの手から私に
持って来てくれたのよ。―― さあ、珍しい指環をごらんなさい。
指環のすばらしい輝きであなたの頬は青ざめているわ。
厚かましいあなたの口は閉じなさい。

この言葉を聞くと、ブリュンヒルドゥルは突然黙って立ち去ってしまう。のちの登場人物たちの言葉から察するに、もちろんこのグートルーナの一言でブリュンヒルドゥルは腹を立てたのではない。婚礼の日から積もり積もっていた憤慨が、このライン河の中でのグートルーナの言葉で一気に爆発したと言ってもよいであろう。

突然ブリュンヒルドゥルが怒って立ち去ったあと、グートルーナもそのような言葉を吐いたことを後悔する。狩りに出かけようとしていたジグルトがちょうどそこを通りかかったので、グートルーナは夫に不安な気持ちを打ち明ける(2553-8)ものの、夫から口止めされていた秘密をブリュンヒルドゥルにしゃべってしまった (2585-8) ことは、どうしても夫に話すことはできなかった。グートルーナは、ジグルトが立ち去ったあと、ただ独り心の中で後悔する (2589-91) だけである。

一方、決定的な恥辱を受けたブリュンヒルドゥルは、それからというもの独り自分の部屋に閉じこもったままである。夫グンナルは塞ぎ込んだ妻を訪ねていって宥(なだ)めようとする[62]が、彼女は「相変わらずぐっすり、じっと寝ているまま」(2592-3) であり、グンナルとしても「どう手助けしてよいか分からない」(2593) 有様である。このブリュンヒルドゥルの狂乱 (2668) に責任を感じているグートルーネは、夫ジグルトに「3日前[63]から黙ったままじっと寝ている」(2684-5) 彼女を訪ねていって、彼女と仲直りしてほしい (2690) と頼む。そこでジグルトはブリュンヒルドゥルの部屋を訪ねてゆくが、この二人の対面の場面が『ヴォルスンガ・サガ』第31章[64]の同様の場面をかなり忠実に再現したも

62) ただし、その対面の場面は、フケーの戯曲では省略されていて、のちの登場人物たちの会話から読み取られるだけである。
63) 『ヴォルスンガ・サガ』では7日前となっている。(菅原邦城訳：前掲書98頁参照)
64) 菅原邦城訳：前掲書98-102頁。

のであることは、そこで二人が交わす会話が逐語的にほぼ同じことからも明白である。ただ最後の方でジグルトが真相を打ち明ける言葉は、フケーの戯曲では次のようにかなりの分量に敷衍されて、より詳しいものとなっている。

O wahrlich, solch ein zaubrisches Vergessen
Hielt mich befangen, daß ich nicht des Bunds
Gedachte, nicht was sonst geschehen war,
Bis du als Gunnars Hausfrau vor mich tratst.
Da erst — doch unvollkommen, stückweis nur,—
Kam die Vergangenheit in mein Gemüt;
Nun fing die Angst in meiner Seelen an
Und Überdruß all meines Tuns und Seins.
Ich schwieg doch vor den Kön'gen, meinen Schwähern,
Von deinem Anblick innerlich gestärkt,
Von deinem süßen Anblick; — ja, Brynhildur,
Nun berg' ich dirs nicht länger — naher Tod
Entbindet mir die Zunge — lieber viel,
Als mein selbsteignes Leben bist du mir.
Grimhildurs Trug, ihr böser Zaubertrank
Hat uns geschieden wider Lieb' und Recht.
Könnt' es mir noch gelingen, dich, mein Lieb,
Mein erstes, schönes, wundervolles Lieb,
Zu halten dich vom grimmen Tod zurück,
Mit allem Faffnersgold, das mein gehört,
Kauft' ich es freudig, sonder Zögern ab.
ja, wenn du's forderst, will ich — furchtbarlich
Erbebt's in mir bei diesem strengen Wort —
Will ich verstoßen mein liebreizend Weib,
Nicht achten ihrer Schönheit, nicht des Sohns,
Den sie geboren mir, der meines Vaters,
Des hohen Königs Siegmund Namen trägt —
Ich will's; — heimführen dich! — (2748-75)

ああ、本当なのだ、私は魔法の忘却に

とらえられてしまって、契りのことを思い出さなかったのだ。
――さもなければそのようなことは起こらなかったろう――
そなたがグンナルの妻として私の前に現れて、
ようやく――不完全で、断片的ではあったが――
私の心に過去の出来事が蘇ってきた。
私の心には不安が広がり始め、
私の行為と存在すべてが嫌になってきた。
しかし私は義兄弟の国王たちには黙っていたのだ。
そなたの姿、そなたの愛らしい姿に
内心強められて――そう、ブリュンヒルドゥルよ、
もはやそなたに隠し立てはしない――近い死が
私の舌を解きほぐすのだが――そなたは私にとって
私自身の命よりもずっと大切なのだ。
グリームヒルドゥルの企み、彼女の邪悪な魔法の飲み物が
愛と正義に反して私たちを引き離したのだ。
愛しいそなたを、私の最初の、美しい、
素晴らしいそなたを
恐ろしい死からまだ引き止められるものならば、
私の所有しているファフナーの黄金すべてを費やしてでも、
喜んで、ためらうことなく、そなたを獲得したい。
まこと、そなたが要求するなら、――この厳粛な言葉に
私は恐ろしいほどブルブル震えるのだが――
私は愛しい妻を追い出すことにしよう。
美しい妻のことも、彼女が生んだ息子――
私の父、気高いジークムント王の名前を
受け継いだ――のことも忘れて、
私はそなたを故郷へ連れ帰ることにしよう！

このようなジグルトの「厳粛な言葉」(2770) に対して、ブリュンヒルドゥルもまた『ヴォルスンガ・サガ』第31章における同様の言葉[65] を敷衍して、次のように答える。

65) 菅原邦城訳：前掲書 102頁。

Nicht in derselben Pfalz zu ehlichen
Zwei Kön'ge, ziemt mir. Gunnar hat mein Treuwort.
Ich halt's. Doch auch besteht der frühre Eid,
Nun klar der Trug mir ward, nur dessen Ehfrau
Zu bleiben, der durch Wafurloga ritt.
Das tat Sigurd, nicht Gunnar; Sigurds Weib
Kann ich doch nimmer werden, eben auch
Nicht andern Mannes Weib. So büß' ich denn
Schuldlosen Irrtum mit freiwill'gem Tod. (2781-89)

同じ城で二人の王と結婚することは
私にふさわしくありません。グンナルは私に誠実を誓いました。
私はそれを守ります。しかしそれ以前の誓いもまたあるのです。
ヴァフルローガを乗り越えた勇士の妻である
ということに関して、今や疑いが私には明らかになったのです。
それを果たしたのはジグルトであって、グンナルではありません。
私はジグルトの妻になることも、ましてや
ほかの男の妻になることもできません。それで私は
罪のない過ちを自由意志の死でもって償うことにします。

このように語り終えると、ブリュンヒルドゥルは後ろに倒れ込んでしまう。彼女のこのような言葉にジグルトの方もなす術(すべ)をなくして、彼女の部屋を立ち去ってしまうのである。

グンナルは妻のもはや救いようのない有様（2812-5）をジグルトから聞き知ると、再度妻の部屋を訪れて、妻を宥(なだ)めようとするが、彼女の悲嘆はなおも高まるばかりである。そしてついには虚偽をまじえて次のように怒りを爆発させる。

Froh sein — Nicht leben! — Sigurd hinterging
So mich als dich; mit ihm teilst du mein Bett.
Zwei Ehgemahle mir in einer Burg —
Abscheu erfaßt mich.— einer von uns drei'n
Muß sterben: du, ich oder Sigurd! — Was?
Was? Hat er unsre Heimlichkeiten nicht

Gudrunen offenbart, der Weiberknecht?
Hat die mich nicht geschmäht? —Geschmäht! Ihr Himmel!
(2818-25)

楽しいですって？とんでもない！ジグルトは私とあなたを
欺いたのよ。彼とともにあなたは私のベッドを分け合ったのだから。
私には二人の夫が一つの城にいるのです。
私は嫌悪にとらえられます。私たち三人のうち誰か一人が
死なねばなりません。あなたか、私か、ジグルトが！何ですって？
何ですって？彼は私たちの秘密を卑しい女の
グートルーナに打ち明けなかったかですって？
彼女が私を罵らなかったかですって？——罵ったのよ！本当に！

特に下線部の言葉は『ヴォルスンガ・サガ』第31章[66]におけるものと逐語的に同じ表現である。ただ『ヴォルスンガ・サガ』第32章[67]ではこのあとブリュンヒルドは一端部屋から外へ出て行って、自らの女館（スケンマ）の壁の下に腰を下ろして、再度グンナルと二人だけで言葉を交わすことになっているが、フケーの戯曲では逆にその部屋の中に彼女の従者たちが大勢押し寄せて来ることになっている。そして彼女はまず従者たちに、それからグンナルに向かってこう言うのである。

Sollen's vernehmen, sollen's,
Solln mich heimführen bald.
Rächen mit reißender Faust
Soll mein rüstiger Vater mich—
Weibeslos, würdigkeitslos
Will ich dich schaun Weichling,
Oder du tötest den Schlangen-
Töter, tötest sein Kind. (2846-53)
・・・
Sieh nun! Ihm selber nun
Send' ich den feindlichen Spruch!
Nicht schone! Die zwei zugleich

66) 菅原邦城訳：前掲書 103頁。
67) 菅原邦城訳：前掲書 104頁。

Haue zusammen! (2858-61)

聞いてください、聞いて。
私をすぐに故郷へ連れ帰ってください。
私の元気な父にその激しいこぶしで
私の復讐をしてほしいわ——
妻もなく、威厳もない、
臆病者のあなたを私は見ることになるのね。
でなければ、あなたは大蛇殺しの英雄を
殺し、その子供をも殺すのです。
・・・
さあ、ごらん！今や私は
彼自身に敵対の言葉を送るのです！
容赦しないで！二人を同時に
斬り裂くのです！

このようにブリュンヒルドゥルが怒りをあらわにしてジグルト親子を殺害するよう要求しているところへ、ヘグネに続いてグットルムが現れる。グンナルとヘグネの弟であるグットルムは長い旅から今ようやく帰国し、ここで初めてブリュンヒルドゥルと対面するが、彼女からいきなり受けたジグルト暗殺の命令(2874-5)を避けて、ひとまずその場を立ち去る。グットルムではジグルトを仕留めることは不可能だと思ったブリュンヒルドゥルは、グンナルとヘグネに向かって再度ジグルト暗殺を要求する(2885-6)。妻の執拗な要求によってグンナルは、ついにジグルト暗殺を決意して、弟ヘグネに援助を願う(2899-900)。それに対してヘグネが兄グンナルを諌めてジグルト暗殺をやめるよう忠告する(2905-12) のは、素材の『ヴォルスンガ・サガ』第32章[68] と同じ展開である。要するに、ヘグネはジグルトとの誓いを破るべきではない (2925-6) と主張するのである。そこでグンナルは、『ヴォルスンガ・サガ』第32章[69] と同じように、グットルムは誓いに加わっていないので、彼にジグルト暗殺を実行してもらおう (2927) と提案して、弟グットルムを呼び寄せる。呼び出されたグットルムは、相手が勇敢な大蛇殺しのジグルトだと知って、一度は断るが、暗殺を果たせばファフナーの財宝が与えられる (2991) という誘惑に負けて、ついに

68) 菅原邦城訳：前掲書 104-5頁。
69) 菅原邦城訳：前掲書 105頁。

その役目を引き受けるのである。この財宝に目が眩んでグットルムがジグルト暗殺を引き受ける点でも、素材の『ヴォルスンガ・サガ』第32章[70]と同じであることが理解できよう。グットルムの決意を聞いたブリュンヒルドゥルは、グットルムをすばらしい食事で元気づけ、暗殺行為についてもっとよく相談するために、彼を自らの部屋へ案内して行くのである。

第六幕

第六幕で取り扱われているのは、物語もいよいよ大詰の「ジグルトの暗殺」である。この英雄の暗殺についてはニーベルンゲン伝説では大きく二つのタイプ――森の中、またはベッドの中での暗殺――に分けられる。例えば、『ニーベルンゲンの歌』[71]や『ティードレクス・サガ』[72]では英雄が森へ狩りに出かけた際に泉の水を飲んでいるときにハゲネにより暗殺されるのに対して、『ヴォルスンガ・サガ』[73]などではベッドの中で就寝中に暗殺されることになっている。フケーの戯曲では後者のタイプに従ってベッドの中で殺されることになっている。ジグルトは、すなわち、グートルーナの膝の上に頭をのせて寝ている。グートルーナは夫のために歌を歌っていたが、そのうち彼女自身も寝入ってしまう。そこへ忍び足で現れたのがグットルムである。グットルムは、義姉ブリュンヒルドゥルが差し出してくれた奇妙な食事[74]で心を元気づけられている(3067-9)。義兄ジグルトが眠っているところを見つけると、剣を握って近づく。『ヴォルスンガ・サガ』第32章[75]では二度もためらったあげく、三度目にようやくジグルトに剣を突き刺すが、フケーの戯曲ではグットルムはいきなり一度でジグルトに剣を突き立てることになっている。ひどい血のしぶきで目覚めたジグルトは、立ち上がって名剣グラムルをつかみ、それを逃げるグットルムめがけて投げつけると、グットルムはドアの前に倒れて死んでしまった。

一方、ジグルトは再びグートルーネの膝に沈み込むと、グートルーネは目覚め、赤い血の波に叫び声を上げる。慌てふためいて嘆く妻を慰めて、ジグルト

70) 菅原邦城訳：前掲書 105頁。
71) 相良守峯訳：前掲書　第16歌章参照。
72) Vgl.Fine ERICHSEN (Übertragen): a.a.O.,S.375.
73) 菅原邦城訳：前掲書（第32章） 106-7頁参照。
74) この食事も『ヴォルスンガ・サガ』（第32章）に由来する。ただし、その作品ではグンナルとホグニが弟グットルムに一匹の蛇と狼肉を料理して食べさせることになっている。(菅原邦城訳：前掲書 105-6頁参照)
75) 菅原邦城訳：前掲書 106-7頁。

はこう言う。

O weine nicht so sehr. Mit deiner Tränen
Triffst du mich mehr, als jener mit dem Schwert.
Beruh'ge dich, du Sigurds schöne Wittib.
Du bleibst nicht hülflos in der Brüder Schirm,
Denn was auch ihren Sinn zu solcher Tat—
—(Heiß brennt mir's in der Brust!) — hat aufgereizt,—
Des eignen Bluts vergißt man nimmermehr,
Und deren nicht, die an den gleichen Brüsten
Mit uns gesogen.—
Nur zu beklagen ist, daß unser Sohn
Noch nicht im Alter steht, wo man vor Feinden
Zu hüten weiß den Pfad.— Nein, weine nicht. (3121-32)

おお、そんなに泣かないでおくれ。剣で打たれるよりも、
そなたの涙の方が私には余計につらい。
落ち着くのだ、ジグルトの美しい妻よ。
そなたは寄る辺ない身のままではなく、兄弟たちに護られるだろう。
というのも、彼らの心をこのような行為に唆したものが
何であれ、——（私の胸の中は熱く燃えている！）——
自らの血族のことを人は決して忘れないものだし、
同じ胸から一緒に吸った血を
忘れることはないのだから。——
ただ嘆かわしいのは、私たちの息子が
まだ敵に対して自らの道を護る術（すべ）を心得ている年齢には
達していないということだ。——だめだ、泣かないでおくれ。

ジグルトのこの言葉は、『ヴォルスンガ・サガ』第32章においてシグルズが口にする「泣くな、そなたの兄弟たちは生きて、そなたを慰めてくれよう。が、私には更に敵に対して自分をよく守れぬ息子があり、これに彼らは好意をもってなかった」という言葉[76]を敷衍したものであろう。ただ『ヴォルスンガ・サガ』

76) 菅原邦城訳：前掲書 107頁。

第32章ではシグルズの息子を殺害する場面は語られていない[77]のに対して、フケーの戯曲ではこのあとジグルトが息を引き取るや否や、グートルーネのもとに侍女が駆けつけて来て、息子が打ち殺されたことを知らせる（3168）のである。もちろん息子が――ブリュンヒルドゥルの命令によることは確かであるものの――誰によって殺害されたかは明らかにされていないが、侍女のそばの小さなベッドで寝ているところを襲われた（3170-3）ことになっている。この叙述などはフケーが素材での矛盾をなくすために新たに付け加えたものである。しかもフケーは、北欧の英雄物語にふさわしく、ジグルトがワルハラの城で息子を膝に抱くようにしており、それはグートルーナの言葉からも明らかである。

Das macht, der Vater hält ihn auf den Knien
In Wallhalls Burg,— schenkt ihm des süßen Mets,
Zeigt ihm die alten Helden seines Stamms,
Und Kindlein greift nach ihren goldnen Kronen,
Nach ihren blanken Waffen, stammelt Gruß — (3174-8)

つまり、父親がワルハラの城で息子を膝に
抱いているのです――息子に甘い蜂蜜酒を差し出して、
一族の昔の英雄たちを見せているのです。
そして息子は英雄たちの黄金の冠をつかんだり、
ピカピカの武器をつかんだりして、挨拶をしているのです――

ワルハラの広間と同じように、この地上でも一緒に二人を血の眠りの中に横たえさせよう（3187-91）として、グートルーナは今やジグルトの遺骸を息子のところに運ぶようにと命じるのである。

一方、このジグルト暗殺を企んだブリュンヒルドゥルは、自らの部屋で華麗に着飾ってグンナルとともに知らせを待ち受けていたが、やがてグートルーナがやって来て悲痛な叫び声を上げるのを聞くと、荒々しい笑い声を上げた。このブリュンヒルドゥルの高笑いも北欧の『ヴォルスンガ・サガ』第32章[78]に由来するものである。ブリュンヒルドゥルはグンナルに向かって言う。

77) ただし、『ヴォルスンガ・サガ』第33章でシグルズの遺骸が焼かれる場面では、その息子の遺体も一緒に焼かれることになっている。（菅原邦城訳：前掲書 111頁参照）

78) 菅原邦城訳：前掲書 107頁。

Hast meins zerrissen mir durch argen Trug;
Sigurd hat meine Treu'— will sie ihm wahren.
Denn was Niflungenlisten uns gestört,
Mein holdes Lieb, vollende nun der Tod. (3351-4)

あなたは邪悪な欺きで私の心を引き裂いたのです。
ジグルトは私に誠実です——私も彼に誠実を示します。
ニフルンゲンの策略で私たちは引き離されましたが、
今や私のやさしい愛を死が成し遂げてくれるのです。

このような言葉を聞いたグンナルは、『ヴォルスンガ・サガ』第33章[79]においてと同じように、ブリュンヒルドゥルに目を再び輝かせるように言って、彼女を抱こうとするが、彼女はそれをはねつける。そばにいたヘグネも兄グンナルに対して、彼女に好きなようにさせるがよいと忠告する。「生きていると、彼女は一族全体に破滅をもたらすばかりだ」(3362-3) と言うのである。

一方、ブリュンヒルドゥルは従者たちに黄金を持って来させて、それをばらまくよう命じる。これも『ヴォルスンガ・サガ』第33章[80]と同じ展開である。黄金が床の上にばらまかれたのを見ると、ブリュンヒルドゥルはヘグネからジグルトの名剣グラムルを奪い取って、それを自らの身体に突き刺す。血を流しながら、ブリュンヒルドゥルはグンナルに自らの意志を伝える。

Laß einen Scheiterhaufen hoch erbaun
Auf nächt'ger Ebne, mein und Sigurds Bett,
Umher der Teppiche vielreiche Zier,
Gefärbt von frisch vergoßnem Menschenblut.
Zu meiner Seiten lagert ihn, den Herrn
Von Niederland, zu seiner Seiten die,
So mit ihm fielen; sein dreijähr'ges Kind,
Das zarte Knäblein Siegmund, dem zunächst
Guttorm, den Mörder; — dann zu seinem Haupt
Zwei meiner Dienerschaft, zwei zu den Füßen —

79) 菅原邦城訳：前掲書 109頁。
80) 菅原邦城訳：前掲書 110頁。

Noch außerdem der besten Falken zwei— (3420-30)
・・・
Auch Gramur lieg' zweischneidig zwischen uns,
Wie, als auf Hindarfiall gemeinschaftlich
Das Brautbett uns vereinigt und getrennt.— (3433-5)

薪の山を夜の平野に高く積み上げて、
私とジグルトのベッドを作ってください。
絨毯のまわりには、新鮮に流れ出た
人間の血で彩って、多くの飾りをつけてください。
私の傍らには彼、ニーデルラントの主人を置き、
彼のそばにはともに倒れた者たち、つまり、彼の3歳の息子、
やさしいジークムント少年、そしてすぐ近くには
暗殺者グットルムを置くのです。——それから彼の枕元には
私の従者2人、足元にも2人——
さらになお最上の2羽の鷹を置くのです——
・・・
グラムルも諸刃のまま私たちの間に置いてください、
ヒンダルフィアルで一緒に
私たちの新婚の床を一つにし、また分け隔てたように。——

この場面も『ヴォルスンガ・サガ』第33章[81]に基づいていることは明らかである。ヴァーグナーの楽劇『神々の黄昏』第三幕における同様の場面[82]をも彷彿とさせるが、フケーの戯曲ではこの場面でファフナーの財宝を取り入れている。すなわち、薪の山を積み上げさせたあと、女々しく泣くグンナルに向かって、ヘグネは「女性ならこの世にたくさんいる。ファフナーの財宝を思いのままにできさえすれば、愛の喜びもすべて保証されているのだ」(3451-3)と言って慰めるが、このヘグネの言葉を聞いてブリュンヒルドゥルは、ファフナーの財宝について次のように予言する。

Hohl braust der Rhein durch dieser Nacht Ergraun.
Schleuß auf den Wasserwall, du tiefer Rhein,

81) 菅原邦城訳：前掲書 111頁。
82) 三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳：ワーグナー『神々の黄昏』 132-3頁。

Denn teure Gabe wird dir bald zu eigen:
Das Faffnersgold, versenkt durch diese zwei,
Vorsichtig tief auf deinen Grund versenkt,
Doch ihnen nie Genuß, und nie der Nachwelt,
Die, blöd erstaunend, nicht einmal vom Hort
Der wundervollen Mär vertrauen wird.— (3470-7)

ライン河は虚ろな音を立ててこの年老いた夜を通り抜けて、
滝へと注ぎ込むのです、お前、深いライン河よ。
貴重な贈り物がまもなくお前のものになるのですから。
ファフナーの黄金は、この二人の男によって、
慎重にお前の河底深くにまで沈められるのです。
しかし彼らの所有とも、後世の人のものともならないでしょう。
後世の人は、ひどく驚いて、その財宝について
不思議な物語に打ち明けることもないでしょう。

下線部は特に『ニーベルンゲンの歌』前編の最終場面と後編の結末[83]を暗示していると考えてもよいであろう。フケーは北欧の伝承を主たる素材としながらも、『ニーベルンゲンの歌』の要素をも無視することはできないのである。こうしてブリュンヒルドゥルは薪の山に火をつけ、それが燃え上がると、彼女はそれを前にして最後の挨拶をするのである。

Laßt nur; ich wanke nicht. Die Flamme leuchtet
Mir zu dem letzten Pfade klar genug.
Glühte nicht lockend deinem edlen Mut,
O lieber Sigurd, Wafurlogas Flamme?
Das ist der Brautgang, für uns zwei bestimmt:
Durch drohnde Glut zur süßen Liebesglut.
Du kamst zu mir erst, nun komm' ich zu dir —
Lächelst, mein holder Bräut'gam? Wie lichtherrlich
Die Funken fliegen, kränzend dir das Haupt!
Hinein! dem glühnden Herzen tut's nicht weh! (3490-9)

83) 相良守峯訳：前掲書　第 1134-40詩節及び第 2367-71詩節参照。

放して、よろよろなんかしないわ。炎が
私の最後の小道を十分に明るく照らしているわ。
ああ、愛しいジグルト、あなたの気高い勇気には
ヴァフルローガの炎は魅惑するように輝いていないの？
この道は婚礼の通路で、私たち二人のために定められたもの。
恐ろしい灼熱の中を通れば、やさしい愛の炎に通じるのよ。
あなたが最初に私のもとに来たけど、今は私があなたのもとに行くわ。
私の愛しい花婿よ、微笑(ほほえ)んでいるの？火花はなんと明るく
飛び散ることでしょう、あなたの頭に花輪を飾っているわ！
入るわよ！燃え上がる心には痛くなんかないわ！

こう言って彼女は、ヴァーグナーの楽劇『神々の黄昏』最終場面[84]を彷彿させるように、炎の中へ飛び込んでジグルトの死に殉ずるのである。グンナルはヘグネの腕の中にもたれ込み、ほかの者たちは驚いてひざまずく。すると薪の山の煙の中から「運命を司る」三人のノルンたちが姿を現し、締め括りの歌を歌う。「人間よ、汝らは私たちから決して逃れられないのだ！」(3535) というノルンたちの最後の言葉は、この作品が北欧的世界の物語であることを強調していると言ってもよいであろう。

おわりに

以上のように見てくると、フケーは戯曲『大蛇殺しのジグルト』を書くにあたって北欧のエッダ・サガ及び『ニーベルンゲンの歌』を用いているが、なかでも北欧の英雄伝説『ヴォルスンガ・サガ』(以下、Vs と略記、あとの数字は章を表す) を主な素材としていることが明らかである。しかも彼はその素材で語り伝えられているニーベルンゲン伝承をなるだけ多く自らの戯曲に取り入れており、作者の関心は英雄ジグルトの物語を新たに創り上げるということよりも、北欧的伝承を再現することにあると言ってもよいであろう。

序幕では、すなわち、鍛冶屋ライゲンが名剣グラムルを鍛え上げる件(くだり) (Vs15) が物語の大筋であるが、そこには名馬選びのエピソード (Vs13) をはじめ、オーディンが木の幹に剣を突き刺して立ち去ったエピソード (Vs 3)、戦いで倒れたジークムントのもとに妻ヒオルディーザが駆けつけるエピソード (Vs12)、さ

84) 三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳：ワーグナー『神々の黄昏』 138-9頁。

らには叔父グリーパーがジグルトの運命を占うエピソード（Vs16）などが織り込まれており、『ヴォルスンガ・サガ』でバラバラに語られていたいくつかのエピソードを名剣グラムル完成のあらすじに結びつけていることが容易に理解できよう。

ジグルトの大蛇退治（Vs18）が展開される第一幕においても同様であり、そこでは父の仇討ちのエピソード（Vs17）から始まって、大蛇退治のジグルトをライゲンが責めるエピソード(Vs19)、大蛇の心臓を食べたジグルトが鳥の声を理解するエピソード(Vs19)、そして邪悪なライゲンを殺害して財宝を獲得するエピソード（Vs20）はもちろんのこと、ヴォルスングの時代にはフィオルニルともニッカルとも呼ばれたオーディンの物語(Vs17)、そしてオーディンがヘーニルとロキとともに旅に出てアンドヴァルの財宝を奪い取ったエピソード(Vs14)なども織り込まれている。オーディンに関する二つのエピソードは、もともとジグルトの大蛇退治に直接関係するものではないが、フケーは特に後者のエピソードを瀕死のライゲンに語らせることによって、アンドヴァルの黄金の呪いをジグルトの運命に結びつけており、劇的効果を上げている一つの例である。

第二幕冒頭に登場する三人のノルンは恐らくは『スノリのエッダ』中の「ギュルヴィたぶらかし」に由来するものと推定されるが、しかし第二幕の大筋として展開されるブリュンヒルドゥルの「目覚め」と、そのあと二度にわたって取り交わされるジグルトとブリュンヒルドゥルとの「婚約」は明らかに『ヴォルスンガ・サガ』を素材としたものである。この「目覚め」（Vs21）と「二度にわたる婚約」(Vs25)は北欧の素材ではごく簡単にしか語られていないのに対して、フケーはそれらを敷衍し、自らのニーベルンゲン世界を構築している。特にブリュンヒルドゥルの「目覚め」の詳細な叙述はのちにヴァーグナーにも影響を及ぼして、楽劇『ジークフリート』中の同様の場面に利用されたことは容易に推定されよう。またハイマー王の城に滞在している（Vs24）うちにブリュンヒルドゥルと再会して二度目の婚約を誓う件（くだり）の詳細な叙述は、この作品におけるフケーの関心を窺い知るうえで貴重な箇所である。フケーはそのほかに「ルーネの教え」（Vs21）と十項目にも及ぶ「ブリュンヒルドゥルの格言」（Vs22）をもそのまま自らの戯曲の中に取り入れており、この作品はまさに古代北欧的世界の戯曲化と言ってもよいであろう。

第三幕では、しかし、ドイツ中世の『ニーベルンゲンの歌』の影響も見られる。ジグルトがギューケ王の城に到着した場面は北欧の素材（Vs28）を下敷きにしているが、その出迎えの際に行われる三つの競技は『ニーベルンゲンの歌』

第7歌章を彷彿とさせるものであり、フケーがそれをここに用いたことはまず間違いない。そのあと催される華やかな宴にギューケ王の姫グートルーナが初めて姿を見せる場面も、『ニーベルンゲンの歌』第5歌章の抒情的な描写の再現である。ただ『ニーベルンゲンの歌』では母妃ウオテはこの宴の場面で娘クリエムヒルトにつき従うだけの脇役に過ぎないのに対して、フケーの戯曲では母親グリームヒルドゥルが重要な役割を演じており、娘グートルーナを英雄ジグルトと結婚させたのも彼女である。否、それどころか彼女は三つの競技のあと、すでにジグルトに忘れ薬を飲ませているのであり、第三幕における筋立ての根底ではやはり北欧の素材（Vs28）が大きな作用を及ぼしているのである。

その王妃グリームヒルドゥルが特に重要な役割を演じているのが第四幕である。長男グンナルにブリュンヒルドゥルとの結婚を勧める（Vs28）のも王妃であれば、その求婚になくてはならない姿交換（Vs29）の魔術をヘグネに教え込んだのも王妃である。しかもそれらはかなり詳しく描写されており、王妃グリームヒルドゥルは北欧の素材においてよりもさらに邪悪な存在である。こうしてあらすじは王妃の策略で展開してゆくが、その後のヒンダルフィアルの城内での出来事（Vs29）も、またヴォルムスに帰還の場面（Vs29）も、さらにはまたジグルトの記憶が蘇ってくる場面（Vs29）も、素材の『ヴォルスンガ・サガ』では簡単に済まされているのに対して、フケーの戯曲ではそれらは敷衍されて詳しい叙述となっている。特に嫉妬深いグンナルの内面と、記憶を取り戻した際のジグルトの内面が詳しく展開されているところにフケーの特徴があると言えよう。

第五幕における「両王妃の口論」についても、フケーは『ヴォルスンガ・サガ』の叙述（Vs30）をかなり忠実に再現している。この口論ですっかり塞ぎ込んだブリュンヒルドゥルにジグルトが対面する場面(Vs31)、並びにそのあとでグンナルが彼女に対面する場面（Vs31）になると、その表現が北欧の素材に逐語的に同じである箇所が多い。その後、ブリュンヒルドゥルがグンナルにジグルト暗殺を要求し、それをヘグネが諌める件（くだり）なども北欧の素材（Vs32）と同じ展開であれば、財宝に目が眩んだグットルムがついにジグルト暗殺の役目を引き受ける件（くだり）もまた北欧の素材（Vs32）と同じである。

第六幕で展開される「ジグルト暗殺」についても、細かな相違はあれ、ほぼ北欧の素材（Vs32）と同じ展開であり、特に瀕死状態のジグルトが最後に妻グートルーネに語る言葉（Vs32）は敷衍されて、より北欧的な内容を示す詳しい叙述となっている。やがてグートルーナの叫び声を聞いてブリュンヒルドゥルが荒々しい笑い声を上げるエピソードも北欧の素材（Vs32）に由来するもので

あれば、ブリュンヒルドゥルが黄金をばらまくエピソードも北欧の素材(Vs33)に基づくものである。最後にブリュンヒルドゥルが自らの胸に剣を突き刺して、ジグルトの遺体を焼く炎の中に飛び込んで殉死する件(くだり)も北欧の素材（Vs33）に由来するものであることは言うまでもない。このブリュンヒルドゥルの殉死のあと、フケーは最後にまたもや三人のノルンを登場させることによって、自らの関心が北欧的世界の再現にあることを強調しているのである。

このようにフケーは特に『ヴォルスンガ・サガ』第13―33章において伝承されているほとんどすべてのエピソードを自らの戯曲の中に織り込んでいることが容易に理解できよう。そのため全体の劇的構成の面で均整を欠くきらいはあるものの、しかし、それだけに彼の関心は北欧の素材を復元することにあることがよりいっそう理解できるのである。このフケーの戯曲をやがてヴァーグナーが利用したであろうことは、楽劇『ニーベルングの指環』四部作中の『ジークフリート』及び『神々の黄昏』における筋の展開がほぼフケーの戯曲と同じであることからも容易に推測されよう。ヴァーグナーの伯父アードルフはフケーと親しく交わっていた[85]だけに、それは大いにありうることである。ともかくもこうしてフケーの戯曲はヴァーグナーに引き継がれ、このヴァーグナーの楽劇によって北欧のニーベルンゲン伝説は蘇り、後世に引き継がれてゆくこととなるのであり、その意味においてもフケーの戯曲『大蛇殺しのジグルト』はニーベルンゲン伝説の伝承において重要な役割を果たす記念作品なのである。

85) Walther ZIESEMER : a.a.O.,S.9.